

---

# 馬駆ける草原に、恋待星は昇りて。（改稿版）

文樹妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬駆ける草原に、恋待星は昇りて。（改稿版）

### 【Nコード】

N5960F

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

国を滅ぼされ、家族も殺された王女、麗凜<sup>れいりん</sup>は敵国に捕らわれ、最大の敵である王との結婚を強いられていた。婚姻も間近に迫ったある日、祝賀のために現れた小国の使者が、死んだはずの愛しい人にそっくりであることに彼女は驚愕する。果たして彼は何者なのか。

。（以前、企画で書いた小説を新人賞に修正、加筆後応募した作品です。種別は短編ですが、実質400字詰め原稿用紙で128枚程度の長編です）

## （前書き）

小説賞応募作品のため、連載形式にしておらず、そのまま短編として投稿してあります。400字詰め原稿用紙で128枚程度の長さですので、申し訳ありませんがご了承くださいませ。（少しでも読みやすいよう、本文中で章分けしました。2011年2月9日）

## 序章

風が吹き渡る。

土と草の匂いを胸いっぱい吸い込んで、少女は駆ける。

花靴の美しい刺繍が汚れるのも厭わずに。

少女が足を繰り返す度に、黒く艶やかな髪之二束が揺れる。

白く透き通るような肌、優美な眉に高い鼻、ふわりとした唇

まさに手折ったばかりの花を思わせる可憐な容姿。しかし凜とした光を放つ大きな瞳が、少女がただ花瓶に飾られるだけの花ではないことを物語っている。

優しく広がる彼女の下衣が、風をはらんで一層はためく。

上等な絹地さえもわずらわしげに持ち上げて、少女はどんどん先へと走っていく。

『麗凜様、お待ちください。そんなに走られては、草に足をとられてしまいますよ』

何度も名を呼ばれて、ようやく少女が振り返る。

最初はすぐ後ろにいたはずの青年は、いつの間にやらかなり後方に遅れをとっていた。

長身をかがめ、長い衣装の裾を持ち上げて走りにくそうにしている姿を、麗凜は可笑しそうに眺める。

『周李しゅうしったら、本当に心配性ね。大丈夫よ、草原だもの。たとえ転んだって怪我なんかしないわ。それにこれぐらい付いて来られなきゃ、私の教育係は務まらないわよ』

いたずらっぽく声を張り上げた麗凜に、彼はついに衣装を汚さずにいることをあきらめたようだった。足を速めて駆けてくる周李を見て、麗凜は笑う。

端正な顔に汗をにじませ、あつという間に麗凜の腕を掴んだ彼は、

得意げに微笑んでみせた。いつもは涼しげな彼の目元が、晴れ渡った青空にまぶしそうにゆがめられている。

『ほら、捕まえましたよ。麗凜様がお怪我でもされたら、私が怒られるのですからね。お転婆な姫君には、本当に困ったものだ』

間近で見つめられ、思わず笑い声をおさめた麗凜を、周李が叱るように見下ろす。

けれど、ちっとも怖くはなかなかった。本当には怒ってなんかいないのがわかるから。

おずおずと見上げた麗凜に、周李は仕方なさそうに表情を緩めた。

ほら、やっぱり周李は優しい。自分のすることを大抵は多めにしてくれるのだ。

麗凜はなぜだか誇らしい気分で、周李を見つめた。

周李は既にいつもの穏やかな瞳でそよそよと踊る草を見ている。

先ほどまで汗をかいていたのが嘘かと思えるほど、その横顔は静かで、優しげな眉や通った鼻筋がすぐ近くに見えて、麗凜は知らず頬を染めた。

瞬きをした周李が自分の方を見る前に、さりげなくその腕を逃れる。本当はそのままでもいいんだけど、見惚れていたことに気づかわれてしまいそうだったから。

気持ちのいい風が吹いて、二人の頬を撫でていった。

周李の黒髪の束が、風に揺れる。

文官である証とも言える長髪は、彼にとっても似合っていた。

武よりも文を尊ぶこの国でも、周李は父王自ら目にかけている人物だ。彼の自然な態度には、全くそんなことを鼻にかける様子もないのだが。

『わあ……見て、周李！』

小高い丘に辿り着いて、一面に広がる風景を見つけた麗凜は、瞳を輝かせて振り返った。

優しく微笑んだ周李は、少し得意げに頷いてみせた。

『以前、警備の兵が教えてくれたんですよ。麗凜様が喜ばれそうだ

と』

こんな場所まで兵たちが来るのだろうか 疑問に思いつつ、王宮の外れに位置する広大な草原を見つめていた麗凜は、思わず笑いが込み上げてきそうになった。だって、自分がこの風麗花ふうれいかが好きなことは、周李にしか言っていないことを思い出したから。

きっと、彼が見つ付けてくれたのだ そんなことすら口にしない彼の控えめな性格が、麗凜は大好きだった。

見渡すばかりの風麗花 細かな花びらが幾重にも重なって、大きく丸い花を形作っているその様子は、小さな太陽のようにも見える。鮮やかな黄色は、まるで自分が本物だと主張しているかのよう  
に、自慢げに日光の下で煌いていた。

『ねえ、周李。この峰陽国ほうやうこくができたのと、風麗花が生まれたのと、どちらが先なのかしら？』

突然の麗凜の質問に、周李は一瞬驚いた顔をしながらも、微笑んで首を傾げた。

『さあ それは私にもわかりかねますが、おそらくは、風麗花ではないでしょうか。いくらこの国が半島でも一、二を争う歴史の古さを誇っているとはいえ、自然には負けるでしょうからね。それが、どうかなされましたか？』

『ううん。ただ、風麗花があんまり綺麗だから、国旗の色に選ばれたのかなと思って もしそうなら、きっと風麗花も誇りに思っているだろうな、なんて考えていたの』

そうじゃないのなら、短い春を終えたらすぐに枯れてしまうのが、可哀相な気がしたのだと、そこまではなんだか気恥ずかしくて口にできなかつたのだが、周李は笑いもせず真面目に頷いてくれた。

『そうですね。私もそうであればいいと思います。どこか懐かしいような暖かい風情が、まるでこの国を象徴しているような花ですか』

周李の優しい答えに、麗凜も嬉しそうに頷いた。

周りを高く険しい山々に囲まれた祖国 峰の間から昇る、朝日

の輝きを意味する国の名前も、その名の通りに美しい大地も、全てが麗凜は好きだった。慎ましやかな国民性は、歴代の王自ら率先して過度の贅沢をせず、限りある自然の恵みを大切に暮らすことを守っているからこそ育まれてきた峰陽の宝なのだと、周李も常日頃教えてくれていた。

峰を渡ってきた優しい風に吹かれて、仲良く揺れる黄色い花々を、麗凜はいつしか微笑みながら見つめていた。

隣で佇む周李の気配を、心地よく感じながら。

いつまでも、彼とこうしていられたならいいのに　そんなささやかな願いごとが、十四歳の麗凜にとって全てだった。

ふと見上げた周李が、二つに結われた自分の髪を見ていたことに気づく。

『どうしたの？　周李』

彼の瞳に何か悲しげな光が宿っていたようで、思わず問いかけた麗凜に、周李ははっと我に返ったかのように瞳を瞬かせ、そつと笑みを浮かべた。

『いいえ　何でもありません。ただ、いつかは麗凜様もその髪を結び上げられる日が来るのだな、とそんなことを思っていただけです』

この峰陽では、婚約と共に二つに結っていた髪を、一つに結い上げるのが慣わしとなっている。

周李の意味する内容に、麗凜は笑顔を消した。

『いやよ、そんなの　私は絶対に、お嫁になんか行かないんだから』

子供がだだをこねるような言い方になった自分の言葉に、周李は少し苦笑した。

『だめですよ、この峰陽のただ一人の王女様が、そのようなことを仰っては』

もちろん、わかっている。いずれはふさわしい相手に嫁ぐことそして子孫を残して、この国を繁栄させること、それこそが自分

に課せられた義務だということも。それでも、そんなことは考えた  
くもなかった。

だって。

見上げた先で笑う周李は、いつものように優しい瞳をしていた。

### 一、忘れ得ぬ過去の夢

また、昔の夢。

ぼんやりとした視界に見慣れた部屋が映って、麗凜は溜息をつい  
た。

いつもそうだ。目を覚ました時に探してしまう。もはや存在しな  
い、郷里の風景、懐かしい人々を。

今ある全てのほうが夢だったなら、どれほどよかったか。

それでも、今日は悪夢じゃなかった。まだ幸せだった頃の、遠い  
記憶。

「おはようございます、姫様」

扉の向こうで声がして、麗凜は危うく滲みかけた涙を拭った。

寝乱れて貼り付いていた、黒く長い髪を乱暴にはらう。

寝台に起き上がった彼女の元へ、女官が水桶を用意し、朝の身支  
度が始められる。

薔薇の花びらを浮かべた水で、丁寧に顔や足まで洗い清めてくれ  
る女官たちの手つきを、麗凜はただぼんやりと見つめていた。

『姫』だなんて、もう失われた身分だというのに。

国も家族も、何もかもを失った彼女をまだそう呼ぶのは、一応の  
形式らしい。

あきらかに蔑んだ様子で呼ばれることも少なくともはないのだが、身  
の回りの世話を買って出てくれている女官たちからは、皮肉めいた  
響きを感じることはなかった。

「昨夜は、よくお休みになられましたか？」

そう笑いかけてくれる年若い女官にも、麗凜は曖昧な笑みだけで答えた。

あの日から、よく眠れたことなんてありはしないのだ。悪夢ばかりを繰り返しては、いまだに泣きながら目覚める。

そんな自分に、麗凜は苦笑していた。

それでもわずかな笑みを見せるようになった麗凜の様子に、女官はほっとしているようだった。

この宮へ連れて来られてから、既に半年　それだけの月日が経つても、数えるほどにしか言葉も発さず、最初は食事すらろくにとるうとしなかつたのだから。

「あいかわらず、姫様のお肌の透き通るようではいらっしやること…  
…どんな花もかすんでしまふようでございますわ」

「本当に　いらしたばかりの頃からお人形のように美しくいらっしやいましたけれど、最近ではますます磨きがかかって、姫様ほどにお美しい方は、この国をいくら探しても見つからぬと皆が噂しておりますのよ」

笑い合う女官たちの声が、空々しく聞こえる。麗凜は知っているのだ。人形のように美しい　そう口々に言う陰で、氷の人形だと噂をされていることも。無表情で、からっぱの心をしたお人形。綺麗なだけの、お飾りだと。

いつものように無反応な麗凜を困んで、女官たちは困ったように黙り込む。それにすら興味がないように、麗凜はただ瞳を伏せた。

「本日は、喜ばしい知らせがございますよ、姫様」

髪に櫛を入れていた女官が気を取り直したように言う。瞳を上げると、少し年長の域に入る女官が、ふくよかな頬に笑みをのせていた。

「陛下が昨夜遅く無事にお戻りになられたそうです。今朝はお会いになりますよ」

途端に興味を失ったように逸らされた麗凜の視線は、爽やかな風

が吹き込んだ窓の外をさまよう。背後で苦笑と共にため息が聞こえたが、あえてそれも無視した。

帰ってこなくともよかったのに。

いいや、帰ってこないことをこそ、自分は望んでいた。

地方の大きな反乱を鎮圧するためだとか、何だとか、そのような旅の目的など、自分には何ら関係のないことだ。最近この国でも、あちらこちらで小規模な乱が起きているらしいとは、女官の噂話で聞いている。民を人とも思わぬ冷酷な圧政は、故郷にいてすら、耳に届いていた。まさか峰陽国にまで手を伸ばそうとは、思ってもいなかったけれど。

あの時、自分も死んでしまえばよかったのだ。

心の奥深くに押し込めたはずの痛みが、また麗凜を苛みはじめる。何度血を流しても、自分の心程度では足りないらしい。

大きすぎる後悔と自責と、そして憎しみが溢れ出す。

閉じた瞼の裏に、銀粧刀の煌きが見える気がした。

自分はここで、一体何をやっているのだろう。

苦しくなって開いた瞳に、鏡の中の自分が映る。

豪華に飾り立てられた衣装が、冷めた表情とは不釣り合いなほどに精彩を放っている。

龍の刺繍が施された、赤を基調にした布地　この双龍国しゅうりゅうこくの伝統的な王族の衣装を着せられていること自体が、麗凜にとっては最大の屈辱だった。

それを恩赦であるとか、光栄に思えだとかのたまうこの国の官吏たちも、そしてそれを命じた張本人も、憎くてたまらなかった。

何も……何一つ、持ち出してくることもできなかった。

全て焼き払われ、思い出を偲ぶことのできる品物すら手元には残らずに。

意識を失ったまま船に寄せられ、正気を取り戻した時には既に祖国のあつた半島すら見えなくなっていた。大陸に着き、この王宮へ入った後すぐに、唯一故国の品であった自らの衣装も有無を言わさ

ず処分された。

優しい色で染められた、あの膨らんだ下衣を見ることはもう叶わない。女性らしく、慎ましやかな民族性を表したかのような、懐かしい伝統衣装はもはや失われてしまったのだ。いくら拒否しようとも、今麗凜が身につけるのは、体の線をまっすぐに包んだ双龍の衣装、派手なばかりで、上品だとはとても思えぬ代物だった。

使われる言葉の微妙な差異や、食事の違いに戸惑ったことも、既に遠い記憶だ。

泣いてばかりで日々を過ごして、涙も枯れた頃に気づいたのは、異なる気候。

高い峰から吹き荒れる季節風で、故郷の冬は長く、春は短かった。ほんのわずかな夏には、太陽の恩恵を預かるうと、緑が我先にと風にそよいでいたあの大地とは違い、大陸の端に位置するこの国は無駄なほどに温暖で、初夏を迎える今も、木々はただ緩慢に枝を伸ばしているだけのように見えた。

そんな恵みを享受してきた国が、麗凜の全てを奪い、のうのうと息づいているのかと思うと、呼吸することすら恨めしくなるのだった。

「今日の機嫌はいかがかな、麗凜よ」

鼻の下の髭を整えながら問うのは、麗凜にとって、最大の敵である男だ。

この双龍国の王、双剣そつげん 麗凜の国も家族も奪った憎い男は、いけしゃあしゃあと微笑んでみせる。豪華な羽や宝石をあしらった衣装が、相変わらず悪趣味さを際立たせていた。

無表情のまま何も答えないでいる麗凜を見て、いつものごとく渋い顔をする面々の中でも、双剣は余裕を失わずに笑う。

「半月ぶりだというのに、相変わらずそっけないことだ。そなたの美しい声を聞けるのはいつかと心待ちにしているこの私を、少しは喜ばせてはくれんのかね」

にやにやと、いやらしい笑みを向けられて、麗凜は思わずそっぽを向く。震えそうになる手を握り締めるのが精一杯だった。

「無理やりにも自分のものにできるのを、こうして待ってやっているのだぞ？ 寛大な私の優しさを、いつわかってくれるのだ」

唇を噛み締めて、赤色にあふれた王宮の装飾を睨みつける。

憎い、憎い、何もかもが憎い　この赤い国も、傲慢な王も。

黙っている麗凜のもとに歩み寄った双剣は、細い顎に手をかけて、鮮やかな紅をひいた麗凜の唇をまじまじと覗き込んだ。

「わかっているだろうな　そなたの命など、この私の思い一つだ。

婚礼はもう半月後に迫っている。拒否し続けることなど、不可能

もはやそなたの全ては、私のものだ。私を憎む、その瞳を受けながら……抱いてやるうよ」

耳元で囁いて、自らの唇を舐める双剣に、虫唾が走る。倍以上も年の離れた男にそんなことを言われていることにも、本能的に拒否感がわきあがる。彼の全てが憎くてたまらない麗凜の心知らぬはずはなかるうに、それすらも楽しんでるかのような双剣。

一国の王であるというだけで、彼の寵を受けようという女たちが多くいることも知っている。外見だけをとってみれば、大柄でたくましく、特に醜いわけでもない。それでも彼の中にある残忍さを知る麗凜には、そんな女たちが理解できなかった。

ふん、と荒い鼻息を吐いて、自分の顎を解放した男を、麗凜は唇を噛み締めて睨みつけた。

それだけが、彼女にできる精一杯の抵抗であったから。

既にその瞳からも興味を失ったかのように、玉座へと戻った双剣。その動作で、叩頭していた官吏たちが顔を上げた。

「陛下、ご不在の間に各国の使者たちからの文が届いております。

皆、我先に祝賀の行事に駆けつけたいと待ち望んでいるようでございますよ」

我先に王の機嫌を取ろうとしているのは、自分たちのほうではないのか。

明らかな愛想笑いを浮かべた複数の顔に思わず眉をひそめながらも、麗凜は退出を示すため膝を折った。女官にいざなわれて廊下へと向かう麗凜の耳に、使者たちとの謁見の日程などが話されているのが聞こえる。他ならぬ自分の婚姻であるのに、どこか遠い国の出来事のような、そんな奇妙な感覚が拭えずにいた。

\*\*\*

悪夢と幸せな夢とは紙一重だ。

だってあの夜、人生で最高に幸せだった時間と、最悪の出来事とが重なってしまったのだから。

『陛下には内緒ですよ』

そう言っただけ周李が連れてきてくれた、真夜中の草原。

春には満開の風麗花が綺麗だったその場所も、冬の闇の中ではただ淋しく、広大な台地に見えた。雪が降ればまだ趣もあるのだが、しんと冷え込みながらも、空は初雪を精一杯溜め込んでいるようで、乾いた寒気だけが体温を奪うような夜だった。

風邪を引かないようにと毛皮の外套を着せられて、白い息を吐きながら、周李の後についていく。突然の誘いに、いつもは人の何倍も口うるさく、心配性な彼が一体どうしたのだろうと驚きながらも、わくわくする気持ちのほうが勝っていた。

『風と天気の関係で、今夜なら綺麗に見えるはずなんです』

博学な周李　いつも穏やかで冷静な彼が、珍しく少年のような瞳で夜空を見つめていることに、麗凜の頬も緩む。

そんな麗凜の腕を、周李が声を上げて引いた。

『ほら、見てください、あそこです！』

彼の指がさした方角を見て、麗凜も大きく目を見開いた。

「綺麗……！」

満天の星空に、丸く浮かんだ月　その隣できらきらと輝くのは、不思議な星だった。

黄色の月に寄り添うように光る、薄桃色の優しい星。

今まで見たことのない色合いに、麗凜はひたすら口を開けて上を見ている。

「それほど喜んでいただければ、私も嬉しいですよ」

そつとかけられた周李の声で、あわてて口を閉じる。赤くなる自分の反応を予想していたかのように、周李は優しく笑った。

「あれは、恋待星<sup>こいまらほし</sup>、というんです」

少しふくれかけた麗凜に、周李が笑顔で説明する。その名の響きに、麗凜は黙った。

「いつもは普通の白い星でしかないんですが　年に何度か、あのような薄桃色に染まる時がある。その色と、月に寄り添ったような形から、恋待星と呼ばれるようになったそうです。恋しい相手待ち続け、やっと巡り会えた時にだけ美しく染まる　そんな風に考えられているんですよ」

勉強の時間はあまり好きではないけれど、こんな風に周李が教えてくれる何気ない話には、熱心に耳を傾ける麗凜だった。

寒さも忘れるほどに、ただ星空を眺めている。そんな静かな時間を彼と過ごせるだけで、麗凜は心が満たされるのを感じていた。

「ありがとう、周李。こんなに美しくて、素敵なものを見せてくれて……」

微笑みかけた麗凜に、周李はいつもの笑顔を返してくれた。その瞬間だった。

遠くに見える王宮から、火の手が上がっているのを目にしたのは、暗闇に煌々と灯っていく赤い炎。巻き上がる黒い煙を背に、その色は奇妙なほど鮮やかに見えた。寝静まっていたような辺りの空気が、焦げ臭い匂いを微かに伝えてくる。

『周李……!!』

不安げに名を呼んで、腕にしがみついた麗凜に、周李も緊迫した表情で振り向く。

『火事かしら、大変』

顔色を変えた麗凜を見た周李は、今までに見たことがないくらい、深刻な顔をしていた。

彼が口を開く前に、麗凜が何かを見つけたように声を上げる。

『見て 誰か、こちらへ来るわ!』

暗闇から現れたのは、馬に乗った一人の兵だった。

『麗凜様! お待ちください』

周李の静止も聞かず、あわてて近寄ろうとした麗凜は、自分たちを見とめるなり、ずるりと馬の背から転げ落ちた兵の姿に声なき悲鳴を上げる。麗凜をかばうように前に出た周李は、味方の兵であることを確かめて、張りつめた顔で近づいた。

『どうした、何事だ!』

彼の問いに、わずかに瞳を開けた兵は、ほっとしたように口を開いたのだ。

『麗、凜様 よかった、ご無事で……どうか、お逃げください。』

双龍国の、奇襲が』

息も絶え絶えにそこまで言って、力尽きたように動かなくなった兵に、周李の顔が強張った。

『麗凜様! すぐに馬に 私がお守りします。どこか安全なところ……!!』

二人で乗ってきた白い馬に、動けないでいる麗凜を強引に導いた周李は、いつもの穏やかな彼ではなかった。

国の危機なのだ、そう頭には浮かんだものの、どこかに実感がわかないまま、麗凜ははっと彼を見上げた。

『お父様とお母様が ご無事かしら、私だけ逃げるなんて、そんなこと……!!』

あわてて叫んだ麗凜を無理やりにも馬に乗せた周李は、強張った

ままの表情で麗凜の手を握った。

『今はとにかく、麗凜様のお命を　一刻の猶予もございません！』  
そして、周李が自分の後ろにまたがろうとした、その時。

悪夢が起こってしまったのだ。

一瞬、周李のうめき声が聞こえたと思ったその時には、既に彼の体が揺らいでいった。

草原に倒れこんだ周李の姿に、麗凜は悲鳴を上げた。

『周李、周李！』

急いで馬を下りて駆け寄って、ようやく月光に照らされた彼の背中を見た。

鋭く突き刺さった矢の下から、赤く、鮮やかな血があふれだしていくのを。

『周……李』

一気に血の気が引いていくのがわかった。

足元が震えて、その場に膝をついてしまう。そんな麗凜の声に、苦しげに顔を向けた周李は、思うように動かないような手をなんとか持ち上げて、自分を捜しているようだった。

『麗……凜様、どうか、お逃げに』

かすれた声がそう告げる。それでも麗凜は首を横に振った。

『いや……いやよ、周李』

こんなことが現実だなんて、認めたくない　そんな彼女の思いとは裏腹に、周李の背中に流れる血は増えていく。戸惑いながらも抱き起こそうと触れた麗凜の手は、べったりと赤く染まった。腕の中で荒い息を繰り返している周李は、今にも意識を失いそうに見えるのに、どうすればいいのかわからない。麻痺してしまったかのように、思考が働かない。

矢を射てきた者らしき人物が、こちらを指して近づいてくるのが見えても、麗凜は動けずにいた。

暗闇の中、星空だけが自分たちを照らしている。つい先ほど、美しい恋待星の話に笑いあっただばかりだというのに。

『周李……しつかりして、周李　！』

彼の体を揺すって、必死で叫んだ麗凜に、周李はゆっくりと笑みを浮かべた。いつもの優しいものではなく、悲しく、切なげな笑みを。

既に意識が朦朧としているのか、焦点の合わない瞳が麗凜に向けられる。

『麗、凜様　ずっと……お慕いしておりました。お守りできなくて　申し訳、ございません……』

それが限界であったかのように、周李の瞼は閉じられた。

夢にまで願った言葉を聞いたことにも気づけなのまま、麗凜は力を失った周李の体を支えた。吐く息よりも、かじかんだ手足よりも、心臓が凍りついたような感覚に支配され、言葉すら浮かばなかった。喜ぶことも悲しむことも、何もできないでいた麗凜の体は、いきなり羽交い絞めにされた。

いつの間にか背後から迫っていたらしい敵兵たちに捕らわれて、そして前方からやってきた騎乗の人物に、にやりと笑われたのだ。

『峰陽の王女よ　搜したぞ。さあ、ご両親のもとへ案内しよう』

赤い旗を掲げた敵兵に半ば引きずるように連れられ、ようやく麗凜は叫んでいた。

最期の瞬間になってやっと同じ想いでいてくれたことがわかった、愛しい人の名前を　。

有無を言わさず連れられ戻った王宮で、麗凜は立ち尽くしていた。目前で繰り広げられる光景は、今度こそ発狂しそうなものだったのだ。

何がなんだかわからずに叫んで、耐え切れずに逸らした視線を、頭を掴んで引き戻される。

『しつかりと見ておけ。これがお前の国の最期だ』

手を下した張本人である男に、笑いながら突きつけられる現実。

そして聞かされた自分の運命に、ほとんど無意識で覚悟を決める。

血に濡れた外套の隙間に手を入れ、上衣の胸元から、麗凜は銀粧刀を取り出した。

唇を噛み締め、自分でも驚くほどに素早い動きで、鞘から抜き放つ。銀の刃先が、場違いに美しく煌いた。

震える手のひらの赤さを見て、残酷で温かな感触が蘇り、麗凜は目を閉じて、その小さな刀を一気に胸元に突き刺そうとした。

しかし、唯一の救いは訪れなかったのだ。

『銀粧刀か。そういえば、この国の女はそんな物で身を守るのだったな』

麗凜にとつて最後の望みであつた小刀は、カラリと軽い音を立てて、床に払い落とされていた。白く細い彼女の手首を掴んだ男は、ちらりと鞘に施された七宝細工に目を落とした後、嘲笑うかのように鼻を鳴らした。

『貞節のためには死を選ぶ、か。健気なことよ。しかしそのように憂えることはなからう。本当なら王族など皆殺しにするとところを、命拾ひしたどころか、妻として迎えてやるのだ。荣誉なことだと思わぬか』

冷ややかに麗凜を見下ろしていた男の目は、床に転がった二つの首へと移され、勝ち誇つたように輝いた。

『峰陽は滅びた。だが、そなただけは我が国へ連れ帰ってやろう。』

その美しさに見合うよう、後宮に大きな宮を建てよう。大事にしてやるぞ？ 大事に、な』

囁かれる言葉は、既に意味を伝えてこない。

蒼白になつた麗凜の前で、美しかった王宮が、この世の地獄と化している。

調度品を奪い、闊歩する赤い鎧の兵士たち。懸命に対抗していた兵の姿は、もう一人としていない。逃げ惑っていた女官たちも、物言わぬ姿となつて転がっていた。

悲鳴が、断末魔の声が耳に蘇り、麗凜はまた震え出す。

あまりの衝撃で乾いたようだった心が、叫び始める。

『お、お父様……お母様　あ、ああ……いやああああ！』

首を振り、悲痛な絶叫を上げる麗凜を、男の目配せによって駆け付けた兵士たちが捕らえる。

『丁重にお連れしる。いいな、くれぐれも自害はさせるな』

それだけ言いおくと、男は冷徹な顔で身を翻した。

『咲き誇る前の蕾つぼみ　か。今のうちに積むのも良い。いずれ大輪の花になるう』

背後で一人得心が行ったかのように眩き、笑う男の声を、麗凜は震えながら聞いていた。

力を失った華奢な体は、簡単に引きずられていく。

乱暴に口内に布を押し込められ、叫ぶ事すらできずに麗凜はただ瞳を見開いていた。

兵士の靴で踏まれた絹の下衣が裂けていく。千切れた飾り紐に施された、可憐な花刺繍。

その鮮やかな黄色が、倒れた兵士の赤い色に染まる。

限界を超えて意識を手放す直前浮かんだ笑顔に、麗凜は声にならない声で呼びかけていた。　何度も、何度も　。

## 二、祝賀の使者は微笑まん

既に日差しは高くなっている。

庭師たちによって水を与えられた庭園の緑はまぶしく、満開を過ぎて花卉のほとんどを落とした春牡丹でさえ、最後の香りを届けていた。その芳香を麗凜は空しい思いで吸い込む。

外の世界が美しければ美しいほど、部屋の中にいる自分が悲しくなるのだ。

青磁の壺や、金の彫刻がところせましと並べられ、壁には大きな

水墨画、寝起きするのは優美な絹地の寝台、床には季節ごとに色合いを変えられる美しい敷物　　おおよそ若い女性たちが夢に見るだろう、広大な宮の一室を与えられてはいても、それは麗凜にとって牢獄に過ぎなかった。

宮の外へ出ることは許されず、自分の部屋にあってもなお、誰かの目にさらされている。

現に今も、女官の一人が窓際に佇む自分の側に控えていた。息がつまるような気分にも慣れてしまったけれど　　。　　いつ自殺を企てるかわからないと、細心の注意をはらわれた結果だという。

そんなにまでして、双剣は自分を手に入れようというのか。もちろん、愛などという甘い感情は、あの男には持ち合わせ得ないものだ。半年の月日を待ったのも、他の国との戦に忙しかったからであり、その間に完全に反乱の目を潰し、峰陽の再興を企てる残党がいなかを確かめるためであったに他ならない。

ただ、全ては国のため　　自分の手で奪った国の王女を、万全の時を待って妻にすることで民にも見せ付けたいのだ。峰陽という名の国が、完全に滅び去った事実を。

今でも目に浮かぶ父と母の最期の姿　　母を守るように重なって倒れていた、父王の体。離れて転がった二人の首は無念と恐怖が入り混じった瞳で麗凜を見ていた。むごい惨状に息を呑んだ麗凜の頭を掴んで、無理やりに見せ付け、笑ってさえたのだ、あの男は　　。

絶対に許せない、彼の腕に抱かれるなどという恥辱は、何としても避けなければいけないというのに……。

この豪華な牢獄から、逃げることもすらできないでいる自分が情けなくて仕方なかった。

「姫様、少しも召し上がっておられないではないですか」

部屋に運ばれた食事を下げに来た女官に言われても、麗凜は顔を向けもせず俯いていた。

食事など、取る気にはなれないのだ。

こんな自分など、このまま消えてなくなってしまう方がいいのに。

いつも考えずにはいられなかったその選択肢を、結局取ることができないでいる理由も、麗凜にはわかっていた。

夢を見ているのだ、自分は 万に一つの可能性でも、捨てきれずにいる。信じたくないのだ。あの日、倒れた周李の背中を染めた、血の色を。

もしかしたら……そう思わずにはいられない。闇に紛れて、生き延びてはいないだろうか。逃げて、どこかで無事ではいるのではないだろうか。そんな風に期待せずにはいられないでいる。だとしたらいつか、迎えに来てくれるかもしれない。自分を救いに来てくれるのでは……と、甘い夢を見てしまう。

同時にそんな愚かな夢を打ち消しながら、愛しい人の最期を思い出して涙に暮れながら、それでも生き延びている。

十五の年を迎えても、あの頃と変わらぬ自分の想いに苦笑しつつ、麗凜は深いため息をついた。再び赤い格子窓の外へと目を向けた彼女には、それでも一人になることすら許されない。

慌しく衣装箱が運び込まれ、女官たちの数が増える。

そういえば、今日は衣装合わせをするとか、聞かされていたのだったか。

麗凜がようやく思い出した頃には、全ての準備が整っていた。衣装を着終わった自分の周りで、女官たちがほろつと吐息をもらすが聞こえた。

「まあ まるで女神のようなお美しさでいらっしやいますわ、姫様」

「これほどのお姫様をお望みであったなら、今まで陛下が正妃をお迎えにならなかった理由も納得が行くというものですわね」

そんな贅美の声も、麗凜にはわずらわしいだけだった。彼女たちが見ているのは、自分の外見だけ。誰も本当の麗凜など、知りはし

ないのだ。

婚礼の衣装だなんて、袖を通すのも汚らわしいものなのに、麗凜にとつては目にするのも嫌なその衣装を、女官たちはうっとりした顔で見つめている。

「双龍中の美を集めたといっても過言ではないほどのお衣装なんですよ。最高級の絹に、金糸の刺繍、それにこの大きな真珠。どれをとつても、双龍国の王妃様になるお方にふさわしい、素晴らしいものですわ。王陛下のお心遣いがおわかりでございましょう？」  
赤く染められたその布地の手触りに感嘆しながら、麗凜の体に合わせて整えている衣装係の言葉に、麗凜は頷くことができなかった。ついに婚礼の日まで一週間となってしまうなんて、信じたくない。

昨夜の夢を思い出して、麗凜は瞳をあげさせた。

まだあんな夢を見てしまうほどに、悪あがきをしている自分。

周李が目の前で倒れたのは、変えようもない事実だというのに、これ以上何を待っているのだろうか。周李は死んだのだ。自分の目の前で、あの憎い男の矢に倒れたのだ。

それがわかっていても、あきらめきれなかった。

最期になつてようやく、彼も同じ想いでいてくれたことがわかったのに。

このままあんな男の妻になるなんて、絶対に嫌だ。その日が来たら、自分で終わりにするしかない。あきらめの悪い自分の命を、自分で終わりにしてやるのだ。

決意を新たにする麗凜の前で、急に宮の外が騒がしくなった。

「どうしたの、何か？」

女官の中でも位の高い一人が、宮を守る衛兵たちに問いかけるのが聞こえる。

兵の一人が、ざわめきの中から答えた。

「新国の使者が、ご婚礼のお祝いの品を持ってきたとか。今、謁見の間へ通されたそうですよ。」

途端に興味を失った麗凜に、同時にやってきたのは王からの使者だった。

またいつものように婚約者としてお披露目されるのかと、ため息をついた麗凜は、別の衣装で飾り立てられる自分を他人事のように見ていた。

金の冠、翡翠の腕輪、耳飾り　化粧を施され、いくら女官が褒め称えようと、鏡の中に映る自分は、あくまで『お人形』に過ぎない。二つに髪を結わえた、幼かった峰陽の王女はもうどこにもいない。まだこの心は、その時のまま凍っているというのに。

長い黒髪が、双龍国の伝統にならっていつものように一つにまとめられ、高く結われる間だけ、わずかに麗凜の瞳に影がさすのだった。

まさか、そんな気持ち駆けていた。

思わず呼んでしまいそうになった名前は、必死で喉の奥に押し込めて、麗凜は震える体をなんとか抑えていることで精一杯だった。

「双剣様には、ご機嫌も麗しゅう　貴方様の素晴らしい御名は、近隣国にも知れ渡っております。我らのような新参者との対面に応じてくださり、身に余る光栄でございます」

まさに社交辞令もいいところの挨拶を口にしたので、膝をついた最高礼をとってみせたその人物　風彩国ふうさいこくからの使者だと名乗った男性に、麗凜の目は釘付けだった。

やわらかな瞳で、優しい笑顔を見せたその人は、ずっと夢にまで焦がれ続けていた愛しい人であったから。

自分の知る、峰陽国の文官に許された淡い黄緑色の長衣ではなく、身につけているのは濃紺色の衣服　乗馬に適した活動的な衣装で

あり、肩幅や体格も少したくましく感じられる。

そして何より、美しかった長髪が、短く切りそろえられているのが一番の違いだろうか。

それでも、優しい面立ち、整った長身、立ち居振る舞い、何もかもが、夢かと思うくらいにあの時倒れたはずの周李そのものだった。

周李　今にもそう呼んで駆け寄りそうになる足を、麗凜はその場に留まらせることで必死で、彼が双剣と何を話しているのかさえ、頭には入らずにいた。かろうじて耳に残ったのは、風彩という国が、最近建ったばかりの騎馬民族の小国だということ。

広大な草原を駆け巡るといふ馬の民は、浅黒い肌をしていると教えてくれたのは、周李その人だ。白い肌をした彼が、そんな国の使者だということに疑問を持ったのは、麗凜だけではなかったらしい。「しかしそなたは　あまり騎馬民族には見えぬな。草原で一日を過ごす彼らは、浅黒い肌をしていると聞いていたが」

双剣の問いかけに、別段動揺も見せずには彼は答える。

「私の母は東の森の民でありました故、この白い肌も母ゆずりのものでございます。各地で商いなどをして過ごして参りましたが、騎馬民族であった父の親族のもとへ身を寄せ、それから今までを草原で過ごしております。それでもなぜか、日に焼けても赤くなるばかりで、騎馬民族特有の肌色にはならないのでございます」

「ほう　それでは、相当優秀な人物であるのだな。他民族の血を持つそなたが、使者の役までこなすほどになったのだから」

あごひげを弄びながら、それほど深い意図もなく呟いたような双剣に、恐縮するように彼はひれ伏した。

「いいえ　騎馬民族は、もとより様々な部族の集まりでございます。私だけが特別なわけではありません」

そんな言葉にどうでもよさそうに頷いた双剣の前に、色とりどりの宝物が並ぶ。

途端に口の端を上げた双剣は、早速近寄って物色するように手に取り始めた。

「こちらはささやかながら、我々の心よりのお祝いの品々でございます。どうぞ、お納めくださいませ」

「これはいい品物だ 特にこの宝玉の腕輪や金のかんざしなど、我が妃にはぴったりではないか」

機嫌をよくした双剣が麗凜に視線をやるのと同時に、初めて彼が麗凜を見る。

心臓が止まりそうなほどに動揺した麗凜を目に、彼はただ静かに口を開いたのだ。

「初めまして、姫君 私は風彩国よりの使者、鳳昇ほうせいと申します。このたびは、ご婚礼まことにおめでとう存じます」

そんな、そんな 一体何がどうなっているのだろうか。

宮へ戻ってから、麗凜の心臓は治まらなかつた。

手にびっしょりと汗をかいている。衣装を着替えた時に、女官に変に思われなかつただろうか。何ともない顔をするのが精一杯で、女官たちが何を話しかけてきたかも覚えていない。

自分がぼんやりとしているのはいつものことだからと、疑問に思われていなければいいけれど。

周李は、まるで初めて自分と会ったかのような瞳で見ている。

そして、その名を鳳昇と言う。風彩国という国から来た、まるで知らない人物だと。

そんな馬鹿な 他人だなんて思えない。あんなにそっくりで、何もかもが彼そのもののだというのに。

確信を持って言えるのだ。細かい仕草まで、周李以外にはあり得ない。だって、ずっと彼を見てきた。ずっと想ってきたのだから。

ふとすれば荒くなる息を必死で整えながら、麗凜は陶器の水差しを手に取る。震える手で湯飲みに水をついで、飲み干してから気づいた。

女官が衣装を戻しに行った今のわずかな瞬間だけ、麗凜はこの広い部屋に一人だ。

使者が来ているからか、それとも婚禮の準備のためか、女官たちにも油断があるのかもしれない。

周李　鳳昇は、三日間の滞在を許されたと聞いた。

彼が帰ってしまう前に、何としてでも確かめなければ、それができなければ、こんな自分が生きている意味などないのだ。

半年間待ちわびた愛しい人が、生きて帰ってきたのかもしれないのだから。

いや、きつとそうであるに違いない！

立ち上がった麗凜は、今まで開けたことのない部屋の扉を、決意を込めてそつと押したのだった。

これは幸運といえるのだろうか。

いつもなら女官たちが大勢いるはずなのに、偶然が重なったのか、誰にも見咎められずに麗凜は宮の裏庭へ出ることができた。

時折通り過ぎていく衛兵にも何とか見つからずに、低木の陰に隠れてやり過ごした。

けれど、いざここまで来てみて、どこへ行けば彼に会えるのかもわからないことに気づいたのだ。こうなつて初めて、ただ泣き、無気力に暮らしてきた自分に苛立ちさえする。もっと王宮の各宮の位置など、何か情報を得ることができていたなら。

そんなことを今後悔しても始まらない。とにかく考えるのだ。使者が滞在するとすれば、どの辺りなのか。

こんなことが双剣に見つかったら、ただではすまされないだろう。それでもいい、彼に会うことができたなら　こんな命など、惜しくはないのだから。

低木の間にしゃがみこんでいた体を起こしかけたその時、また通り過ぎていく衛兵の話し声が聞こえた。

「まったく、祝い事ってのは忙しくて仕方がねえな。明日もどこの国から使者がやってくるとかで、水龍宮は大忙しらしいぜ。俺らにも警備の役が回ってくるし、倍働かせるんだからたまったもんじゃねえよ」

「そうだよなあ。苦労すんのは俺らみたいな下っ端だけで、双剣様からしたら、祝いの品でほくほくなんだろうけどな」

「違いねえ。全く、民には重税を容赦なく取り立てておいて、自分は贅沢三昧だもんな。いい気なもんだ。故郷の母ちゃんも、暮らしがどんどん厳しくなるって愚痴ってたぜ」

「俺んこの村もこないだの水害で食うだけでも精一杯だったのに、役人が全部ぶんどって行つたつてさ。ひでえもんだよな」

「しっ、お前ら、こんな話万が一双剣様の耳にでも入ったら、即刻打ち首だぞ」

深い溜息をついた二人の衛兵に、あわてて仲間が耳打ちしている。麗凜にとっては天の助けとも言える会話だったが、相変わらずひどい双剣のやり口に、麗凜は眉をひそめていた。

王宮の何不自由ない生活では知りえない、民の苦しみ。亡き父であつたなら、そんな独裁は行わなかつたのに。いつでも民を思い、共に質素を心がけていた。半島の気候の厳しさで、穀物の生産量も限られていたから。

それでも、大陸の地の利を生かして、積極的に他国とも貿易を行っている双龍国は豊かで、物資もあふれているのかと思っていた。それが正しく行き渡っていないということだろうか。

けれど、今は心を痛めている場合ではない。物思いにふけりそうになった自分を戒めるように頭を振って、麗凜は兵の言葉を思い出した。

水龍宮　それなら、唯一聞いたことがある。いや、初めてこの王宮へ連れてこられてから、一度だけ見せられたことがあつた。赤を基調にした双龍国の建物では珍しく、緑の屋根と柱が美しい宮だつた。宮の中庭に作られた池の中央に水仕掛けがあつて、絡み合う

金の龍の口から水が流れる仕組みを、双剣が自慢げに説明していた記憶がある。

あれは確か、王宮の中央奥にあったはず　自分が閉じ込められているこの後宮内からだ、結構な距離だったはずだ。

果たして、辿り着けるのだろうか。

一抹の不安がわきあがるのを、麗凜は首を振って抑えた。

そんなことを言っている場合ではない。

何としてでも辿り着くのだ、愛しい周李のもとに。

歩き出そうとした麗凜は、いきなり後ろから腕を引かれ、息を呑んだ。

暴れようとする体を、強い力で押さえつけられる。悲鳴を上げようにも、大きな手で口もふさがれて声も出ない。

一体、誰が！

なんとか振り返った麗凜は、信じられない人物を目にして、息が止まりそうになった。

暴れるのをやめた麗凜に、ようやく抑えつける力を弱めた人物は、周李その人だったのだ。

「とにかくお静かに。このようなところで悲鳴を上げられては、どちらも危うい」

人差し指を口に当てて、素早く囁いた彼に、麗凜も素直に頷いた。やっぱり、自分を救いに来てくれたのだ　嬉しさに舞い上がりそうになる心を冷やしたのは、次に言われた言葉だった。

「先ほどお目にかかりましたね。双剣殿のご婚約者ともあるう姫君が、このようなところで何をしておいでです」

何を他人行儀な　そう返そうとした麗凜の腕を放して、彼は笑った。

「まあ、お互い様といったところか。不要な詮索はしないでおきましよう、こちらにも探られては困る事情があるのでね」

その声の響きも、にやりと笑った顔も、どこか冷たく感じる。言われて彼の服装を見て、先ほどとは違い、黒一色の衣装で全身

を覆い、口元すら布で隠しているのに気づいた。まるでどこかの盗賊か、刺客でもあるかのような。

「私のことは、他言無用に願いますよ。特に、双剣殿にはね　お命が惜しければ、利巧に生きられることだ」

それでは、と鮮やかにすら見える動きで、その場を去ろうとした彼の衣服を、麗凜はなんとか引いた。

「待つて！　あなたは……あなた、周李でしょう？　どうしてなぜ、他人のふりなんてするの？　私を救いに来てくれたんじゃないの？　なら、今すぐに連れて行って……私、ずっとあなたを待つて　！」

感極まって涙すら浮かんだ麗凜の顔を、可笑しそうに彼は眺めた。「周李？　一体、誰のことです？　どなたかと　勘違いされておられるようだが、私は鳳昇だ。風彩国から来た、単なる使者に過ぎない。残念ながら、あなたが待つておられるような方ではありませんよ」

冷え切った瞳　かつて麗凜を映したあの優しい周李のものとは思えない、氷のような眼差しで射抜かれて、麗凜は言葉を止めた。

「さあ、誰かに見つかる前に戻られたほうがいい。くれぐれも、ここに私がいたことは内密に　話された時は、容赦なくあなたのお命も頂きますよ」

黒い衣装を翻して、後宮を囲む樹木の間が消えていく後姿を、麗凜は声もなく見つめていた。

### 三、混乱と自製の果てに

どうやって自分の部屋に戻ったのかさえ、記憶にもない。

気づいた時には寝台に座り込んでいて、どれぐらいの間そうしていたのかすらわからなかった。

夕餉の用意をして現れた女官たちも、誰一人として何も疑問に思っていないような様子からすると、きっと誰にも見咎められずに戻れたのだろう。自分も、そして彼も。

温かな食事も目に映さずに、ぼんやりとしたままの麗凜に声をかけたのは、女官の一人だった。

「あの　少しは召し上がらないと、お体に障りますよ」

その声色が本当に心配そうだったことで、ようやく麗凜は振り向いた。

「ご婚礼までもう日がございません。万が一お倒れにでもなったら……」

そう言っただけで見つめてくるのは、幼さの残る可愛らしい顔をした女官　確か、桃鈴とうりんとかいう名だったろうか。その名を覚えていたのも、あの夜周李が教えてくれた星の名を思わせるからに過ぎない。

年の頃は、おそらく麗凜と同じ位であるはずだが、童顔で優しげな瞳がもう少しあどけなく見せていた。

「いいのよ、私など　いっそのこと、倒れたほうがよっぽどましなのだよ」

珍しく、本当に数えるほどの麗凜の返事を聞いて、桃鈴は一瞬驚いて、それから少し悲しそうな瞳をした。顔の両側で丸く結った髪が、小首を傾げた彼女の動作で軽く揺れる。

「そのような　陛下がご心配なさいます」

「心配……」

その言葉を聞いて、麗凜はかすかに笑いすらした。その複雑な表情に、桃鈴は何も言えないようだった。

心配など、あの男がするはずはない。いや、するとすれば、自分の婚礼が先延ばしになることへの心配といったところか。

自嘲めいた笑みを浮かべた麗凜は、汁物をわずかに口にしながら、食事を下げさせた。

残した食事が運ばれる時、先ほどの兵たちの会話が頭によぎったものの、どうしても喉を通らなかつたのだ。

桃鈴の心配そうな瞳だけがなぜか心に残ったけれど、それすらもわずらわしく感じた。

「どうということなのだろう。」

周李　いや、彼は鳳昇という名の別人だとはつきりと自分に告げた。自分を救いに来たのでもなく、それどころか、冷たい瞳で切り捨てたのだ。

まさか、本当に別人だというのだろうか。

間近で目にしてもあんなにそっくりで、胸の高鳴りを抑えることもできぬほど　　やっと会えた、そう思ったというのに。

あんなに冷たくはねつけられてもなお、自分はまだ期待している。もしかして、何か事情があるのでは　　別人のふりをしているだけで、本当は周李なのではないかと。

確かめるすべもないのだろうか。婚礼の日まで、一週間を切ってしまった。彼が滞在するのも、あと二日。その間、自分はどうすればいいのだろうか　　。

考えれば考えるほど、混乱してくる。

きつと、と期待する心と、もしかして、そう不安に思う心とが交差する。

黙って待っているわけにはいかない。これが最後の、自分に与えられた生きる機会なのだから　　。

「何？　風彩国の話を聞きたい、だと？」

朝の謁見で麗凜の言葉を聞いて、双剣はその太い眉を寄せた。

「そなたがやっと口を開いたかと思ったら　　そのような願い事か？」

何を言い出すのか、そんな怪訝そうな双剣に、麗凜はできるだけ冷静を装って頭を下げた。

「婚礼の日まであとわずか　王妃となるには、幅広く知識を得ておくことも必要ではないかと思ったのです」

そう言った途端、双剣が驚いたような顔をした。

「それでは　やっとな、心を決めてくれたというのか？」

心を決めるも何も　無理やりに妃にされることは決まっていたではないか、と思う気持ちを抑えて、麗凜は微笑すら浮かべてみせた。

「はい　今まで、双剣様のお心の広さに気づかず、本当に私は愚かなことを……。これからは心を入れ替えて、婚礼の日を待ちたいと思っております」

すらすらと出てくる心にもない言葉に、自分で自分が恐ろしくなる。それぐらいに自然に言っただけだ。

これくらいは何ともない　そう、全ては周季に近づいたためだ。

「麗凜よ　そうか……！」

予想以上に嬉しそうな顔で立ち上がった双剣は、満面の笑みで麗凜の肩に手をやった。

「そなたがそう思ってくれるのなら、風彩だろうがどこの国だろうが、話を聞かせてやろう。そなたの望みなら、何でも叶えてやろうではないか」

何度も肩を叩いて笑う双剣に、麗凜は鮮やかな笑みを返した。

「それでは早速使者をこちらに　」

手を叩いて家来に合図をしようとする双剣の腕を、麗凜は引いた。「いえ、話は水龍宮でお聞きしたいのです　できれば、少数の供だけを連れて行きたいのですが」

「何だと？　なぜそのような……」

一転して疑うような目を向けてくる双剣を、安心させるように笑ってやる。

「王妃となれば、今のように自由な身ではいられなくなります。本当は　少女の頃から、世界中の色々な国の話を聞くのが好きだった私の、最後の我が俣を聞いていただけにしようか。騎馬民族

の話聞いて、彼らのように草原を駆け抜ける夢だけでもそつと見てみたいのです……お聞き入れただけませんか、陛下」  
「できるだけしおらしく、両手を合わせて懇願してみせた麗凜に、双剣はしばらく無言でいた後、肩をすくめてみせた。

「まあ、よいだろう。愛しい妃の我が俣だ。王宮内なら危険もなからう」

婚姻を承知したことでの油断なのか、それとも疑いを残したままなのか、それでも機会が生まれたことに変わりはない。

麗凜の細い手に、満足げに自らの唇を付けた双剣にも、必死の思いで愛らしい微笑みを作つてやる。

周李への願いが叶わぬ時には、自分がこの腕に抱かれることもないのだ。

麗凜はこの瞬間に、唯一の恋に命を懸けることを決意したのだ。

金の龍が陽光を受けて輝いている。

きらめく水がその口から流れていく様子を、麗凜は強い瞳で見つめていた。

きつくなってきた日差しも、水龍宮の中までは届かない。この静かな宮の一部屋には。

清涼な緑色が内柱にも使われ、水龍を思わせる調度品で揃えられた部屋は、涼しく落ち着いた雰囲気を出していた。

「姫様のほうからお訪ねいただけるとは、身に余る光栄でございます」

昨日の会話などなかったかのように微笑んでみせた周李、いや鳳昇に、麗凜も笑顔を返した。

まだ胸の鼓動が速まるのは、止められなかったけれど。向かい合って座った二人を見守るように、麗凜の女官が数人控え

ている。その中にいる桃鈴の顔を一瞬見やった後、麗凜は身につけた紅珊瑚の腕輪を掲げて見せた。

「こちらこそ、素晴らしいお祝いの品をたくさん頂いて、嬉しく思っておりますわ。特にこの腕輪など、一目見た時から気に入ってしまいましたもの」

昔自分がこんな口調で話をしたら、周李なら吹き出してしまっただろう。

そんな麗凜の言葉にも、鳳昇は何と言うこともなさそうに微笑んだ。

「それはそれは お気に召していただけたなら、我が王もご満足なされることでしょう」

短く切りそろえられた彼の髪を見つめながら、麗凜はわずかに瞳をそらして腕輪を撫でた。

本当はこんな宝飾品、大嫌いだ。草原を駆け回ったり、野の花を摘んだりして遊ぶのが好きで、いつも周李にたしなめられた。

やはり彼は、周李ではないのだろうか 今更わきあがるうとする不安を押さえつけて、麗凜は彼を見た。

いけない、こんなことでは。彼が周李でなかった場合のことは、まだ考えてはいけない。

「あなた方の王は、どんなお方なんですの？ 何でも、最近建ったばかりの国だとか」

麗凜の問いに、鳳昇は愛想笑いではないような、本物の笑みを浮かべた。

「素晴らしいお方ですよ。一代で方々に散っていた部族たちをまとめ、国を築き上げられた勇猛な王でいらっしやいます。少し悪戯好きの、子供のようなところがありませんのがたまに傷ですが」

王と近い者のように、鳳昇は笑う。単なる使者ではないような、どこか高貴な匂いすら漂ってくるようだった。

もし彼が本当に周李で、今は鳳昇という名で風彩国で生きているとしたら 一体それは、何のためなのだろう。こんなにも自然に

自分など知らないかのような顔をして、もしかしてあの時の傷が原因で、記憶でもなくしているのでは。

ふと浮かんだ可能性に気をとられていた麗凜を引き戻したのは、鳳昇の視線だった。

何かを見透かすかのような、まっすぐな視線　周李なら、どこかにいつも遠慮がちな、控えめなところがあつたのに……。

なぜかどぎまぎしてしまう自分を叱咤して、麗凜は気を取り直したように笑ってみせた。

「きつと素晴らしい王様なのでしょうね。あの　もっとあなた方の国の様子を聞かせていただきたいわ。草原の民というのは、定住地を持たずに移動生活をするって聞いたけれど、それは本当？」

昔、周李その人から習った知識を本人に問い直す。なんだか可笑しな気分だった。

「そうですね。我々草原の民は、天幕という組立式住居に住みます。移動を前提に作られているので、軽量で、簡単に運搬、解体、設営ができるのですよ」

我々、というところを強調したような彼の言葉に、麗凜は一瞬複雑な色を瞳にまじえつつも、微笑みを見せる。

「それでは　常に移動を続けて暮らすのかしら。行く土地がなくなってしまうわね？」

単純な麗凜の疑問に、鳳昇は笑った。

「遊牧の民とはいえ、移動し続けているわけではないのですよ。夏は夏营地で過ごし、秋の間にはできるだけ家畜を太らせる目的で秋营地へ移動し、冬には山かげに作られた冬营地でひたすらじっとして時を過ごす。そのように、合理的に生活しているのです。我々風彩の夏营地はこの双龍国のすぐ近くにありまして、それでこうして祝賀に駆けつけられたというわけですよ」

「まあ、そうでしたの……」

いつの間にか昔のように彼の講義を受けている気分になっていた麗凜は、現実を引き戻されてわずかに瞳を上げさせる。まだそんな

ことは聞きたくない。せめて今だけでも。

「じゃあ、秋になるまでは近くにおられるのね」

独り言のように呟いた彼女に、鳳昇は笑みを崩さず、窓の外に目をやった。

「草原の夏はことのほか短いのです。八月には秋風が吹き始め、すぐに初雪がちらつく。そうすれば、長く厳しい冬がやってきます。今頃は、短い夏を謳歌しようとして、草原のそこかしこで祭りの準備が始まっている頃です。女性たちは馬の搾乳に精を出し、男性たちは弓や馬術を競うための練習に張り切っている。この祭りが終われば、すぐに秋営地への移動が始まりますね」

自分の側からすぐに離れることを暗にほめかされたようで、麗凜はまた浮き上がりかけた心が沈むのを感じる。

こんなに近くで、昔のように語り合っていられるかと思っただのに、彼にとつては何でもないことなのだろうか。本当に彼は……周李ではないのだろうか。

瞳に込めた複雑な思いは、一瞬合った視線の中に混ざり合い、すぐに逸らされてしまった。

「もしも姫君も祭りに来ていただけたら、楽しんでいただけるかと思つのですがね。客人は例外なく献酒でもてなすことになっていて、王族も民も関係なく、その日だけは無礼講で楽しむのですよ」

少しだけ優しくなったような言葉。決して実現などしない話だったが、それでも彼が気を遣ってくれたことで、麗凜は暗い気分から抜け出せたような気がした。

「まあ、素敵ね。私もできることなら、あなた方の国をいつか訪ねてみたいですね。お酒はまだ、あまり飲めませんけれど」

ただの社交辞令に聞こえるように言いながらも、それは麗凜の本心だった。

こんな国で好きでもない相手の妻になるくらいなら、自由な騎馬民族の国で、一人で生きたほうが幸せなのに。

そんな彼女の心の声が聞こえたように、鳳昇は瞳を細めた。

「こちらとしては大歓迎ですよ。風彩国は、どんな民族でも同じ土地に住めば仲間だと認めている、自由な国ですから。ところで姫君は馬にお乗りになるのですか？」

「冗談めかしたように、初めて鳳昇のほうから質問されて、思わず嬉しくなる。」

「まあ、これでも小さい頃から姫君らしくないと言われるほど、乗馬は得意なんですのよ」

そんなことは、周李なら百も承知の事実だ。それでも初めて聞くように、鳳昇は笑う。

「それは頼もしい 私よりもお上手かもしれませんね」

二人が笑いあったところで、桃鈴がお茶を入れるために退出する。彼女には、適当なところで席を立つてくれるよう、それとなく頼んでおいたのだ。

面と向かつて話をしてみても、揺れ動く気持ちに迷いながらも、この時を逃してはいけないと、麗凜は当初の目的を思い出した。時を逃さずに、麗凜は声を上げた。

「いけない……！ 陛下から頂いた首飾りが無いわ！ こちらに来るまでは、確かに身につけていたと思っただけけど……なくしてしまいでしたら、陛下に何とお詫びすればいいのかしら」

大げさかと思いつつも、困ったように立ち上がってみせたら、驚いたように残りの女官も席を立った。

「では、急いで衛兵を呼んで探させましょうか」

そう聞かれて、麗凜はあわててたように止めた。

「そんなことをして、万が一陛下のお耳にでも入ったら私……お願い、あなたたちでこっそり探してきて頂戴。くれぐれも、騒ぎにならないように」

言われて女官たちは、自分たちにも責が及んではいけないと思っただのか、素直に部屋を出て行った。

そして静まり返った水龍宮で、麗凜は打って変わって真剣な顔で、鳳昇に振り返ったのだった。

「さあ、これで二人きりになったわ」

麗凜の挑戦的とも言える言葉を聞いて、座っていたままの鳳昇は、ゆつたりと足を組んでみせた。

「そのお言葉　誰かの耳にでも入れば、誤解されかねませんね」  
余裕を失わない笑顔で見据えられて、胸が高鳴る。自分が知っていた彼は、こんな顔はしなかった。

でも不思議と嫌な気持ちはしない　何だっていい、ようやく二人だけで話せる機会ができたのだから。

「誤解なんかより、知られれば困る事実があると思うのだけれど」  
できるだけ平静に言い返す。震えそうになる足は、長い衣装に隠れて見えはしないのだ。

「もしかして……昨日のことで、脅しにでも来られたのですか」

あくまで冗談めかした言い方で、鳳昇は答えた。それでもその瞳が、少し剣呑な光を帯びたのがわかる。

彼の不思議な迫力に負けないように、麗凜は精一杯胸を張った。

「そうね　そう思いたいなら、思ってもいいわ。そして私を殺すというのなら、どうぞご自由に。でもその前に……一つだけ確かめたいことがあるの」

「　案外と、気の強いお方のような。こちらとしても、今すぐにあなたを殺すわけにもいかないですね。結構です、ご質問があるのなら、何なりと答えしますよ」

周季　本当なら、今すぐにでもそう呼んで抱きつきたい。問いただして、今までの気持ち爆発させて、泣きわめきたい。

会いたかったと、会えて嬉しいのだと叫びたい　けれど、ここまで他人のふりをするからには、彼にも何か事情があるに違いない。  
麗凜は先にそちらを確かめることに決めていた。

「あなたは、何をここにこへやってきたの？ 双龍国を 双剣の首でも取りに来たのかしら？」

誰かに聞かれてもしたらただではすまないだろう、麗凜の問いかけに、鳳昇は無表情のままじつと動かずにいた。

「嘘を言っても無駄よ いいえ、嘘なんかつく必要もない。だってそれこそが、私の望むことだから……」

ひとかけらの嘘も、感情の変化も見逃すまいと見つめる麗凜に、鳳昇はしばらくして、声を上げて笑い始めた。

「何よ……何がおいしいの！」

馬鹿にされたような気分で思わず詰め寄った麗凜に、鳳昇は笑いながら両手を上げた。

「いえ、すみません。おかしくて笑ったわけでは 気の強いも、ここまで来ると見事なものだ。あなたには負けましたよ。本当のことを告白しましょう」

「鳳、昇 ？」

つい呼んでしまったその名前に、彼はこれまで以上に余裕に満ちた笑顔を向けてきた。

「そうです。あなたが仰るとおり、私は双剣の首を取るためにこの国へ来た。正確には、私一人ではありませんが。どうです、ご満足ですか？」

予想はしていたものの、あっさりと肯定されて、麗凜は思わず言葉を失っていた。こんな風に認められるとは思っていなかったのだ。「あなたもそれをお望みなら、何の問題もありませんね。どうぞ、我々の邪魔だけはなさらぬよう」

まるで子供に諭すように言われて、やっと麗凜は彼の顔を睨みつけた。馬鹿にされるために、こんなことを聞いたのではないのだから。

「それなら、私と取引しましょう」

「取引 ？」

意外そうに瞳を上げた鳳昇に、麗凜は頷く。

「そう、私が双剣を油断させて、彼の隙を狙いやすくするわ。そしてたらあなたの役に立つでしょう？　そしてうまく行ったなら　私も連れて行って。あなたの国に　自由な風彩の民に加えてほしいの」

どれだけ危険な取引かなんて、考えもしなかった。

とにかく鳳昇の　周李の役に立ちたい。そして願わくば、本当に彼と逃げる事ができたなら　そんな想いを込めた、麗凜の言葉。

鳳昇はまるで人形のように固まっていたから、ゆっくりと、王も顔負けの威厳に似た空気さえ感じさせる微笑みで、麗凜を見返したのだった。

#### 四、唯一の恋に懸けた命

決行は、鳳昇の滞在最後の夜。

使者たちをもてなすための晚餐の席がもたれるその夜　当初から鳳昇たち風彩の部隊は、それを狙っていたという。

麗凜の役目は、双剣の酒に気づかれぬように薬を盛ること。

寝入った彼の寝所に押し入るのは、鳳昇たちの役。

あとのことは、ひそかに双龍国へ潜入している、風彩の部隊が行う。

素早く打ち合わせされたその事実を、信じられない気持ちで麗凜は何度も頭の中で復唱していた。

まさか、本当に彼が自分を認めてくれるなんて。手伝わせてくれるなんて、思いもよらなかった。

なぜもっと早くこうしなかったのだろう。危険をおかしてでも双剣の命を狙うことなんて、今までにだってできたかもしれないのに。自分の命を絶つことばかりを考えて、憎い相手に復讐しようとは

思いも付かなかった自分の弱さを、麗凜は口惜しく感じていた。

それでも今、こうして周李に会えて、万に一つでも彼に連れて逃げてもらえる可能性ができたのだから、きっと自分は生きていてよかったのだ。

彼が周李でなかったとしても、こんな国で望まぬ結婚をするよりは何倍もいい。

そして、彼が周李でなかったなら 双剣を殺すことさえできれば、自分は死んでしまったっていいのだから。

どちらの道に進むとしても、今のまま生きながら死んでいるような日々からは抜け出せる。

この双龍国で過ごしてきた半年の、長かった苦痛から解放されるのだと思うと、麗凜はようやく息をつける思いでいた。

お父様、お母様……待っていてください。私が、あの憎き男を葬ってみせます。この赤い国を滅ぼすために、命を懸けてみせます……！

鳳昇に渡された睡眠薬の包みをそっと胸元に忍ばせて、麗凜は眠りについた。

あの悪夢の夜から、初めてぐっすりと眠れた夜だった。

いよいよ晚餐が開かれる日の朝を迎えた。

いつもより早く目が覚めた麗凜は、訪れる女官たちにも機嫌よく接した。

先日の双剣との会話からも、すっかり婚姻を承知したのだと思われるらしく、女官たちも安心したように麗凜の世話をしていた。

「ご機嫌がよろしいようで、何よりですわ。姫様」

桃鈴にそう言われたのは、朝餉をいくらか口に入れていた頃だった。

「食欲も出てこられたようで、本当にほっとしました 食後のお

茶も、どうぞお召し上がりくださいませ」

勧められるままに、手渡されたお茶に口をつけた麗凜は、思わず  
呟いた。

「美味しい……これは、桂花茶ではないの？ 爽やかだけれど、  
とても甘いよね」

慣れた味とは少し違う風味に首を傾げた彼女に、桃鈴は微笑む。

「ええ。桂花茶に、緑茶を少しと、それから蜂蜜を加えたもので  
すわ」

立ち上る特徴的な香りと、喉を通る甘さは意外ではあったが、不  
思議と心が休まる気がした。

「こんな飲み方があるなんて、知らなかったわ。峰陽では、お茶の  
味そのままでしか飲まなかったから」

薄桃色の優しい茶器は、桃鈴の笑顔にとても似合っている。少し  
いたずらっぽい光をたたえた瞳が、麗凜を映した。

「双龍でも同じでございますわ。この飲み方は 実を申しますと、  
私の母から教わったものなのです。お茶同士の効用が合わさって、  
より健康に良く、美味しくなると……蜂蜜を加えるのは、心身を休  
ませる効果があるとか」

にこやかに説明する桃鈴に、麗凜は感心したように頷いてから、  
こんな話すら女官たちと交わしたこともなかったことに気づいた。

いつも用意される食事やお茶も、当然のことだと思っていた。そ  
れがこんな風に自分のことを考えて出されているものだということ  
も、彼女たちの心にも、自分は気づいていなかったのだ。

ちくり、と痛んだ胸を押さえて、麗凜は笑顔を作った。桃鈴に不  
自然に思われないように。

「そう そんなことを教えてくださるなんて、素敵なお母様ね。  
故郷で……お元気でいらっしゃるの？」

何気なく問いかけた麗凜に、桃鈴は少し寂しげな微笑を浮かべて、  
瞳を伏せた。

「私が幼い頃に、流行り病で亡くなりました」

「まあ ごめんなさい、私ったら……」

彼女も自分と同じように、大切な家族を亡くしたのかと、麗凜は眉を寄せた。無神経なことを聞いてしまったと、そのまま言葉に迷う。

「気になさらないでください、姫様がお心を碎かれるようなことはございませんから」

慌てたように笑ってみせた桃鈴は、麗凜の湯飲みにお茶を注ぎなおしてくれた。

「でも……姫様とこんな風にお話ができ、嬉しゅうございますわ。先日の、風彩の使者とお話になられたことで、以前よりもお元気になられたようですね」

裏も何も無い桃鈴の笑顔に、一瞬たじろぎつつも、麗凜はできるだけ優しく微笑み返してみせる。今、怪しまれては元も子もないのだ。

「そうね 陛下のお優しいご配慮のおかげだわ。それにあなたもありがとうございます、桃鈴。女官たちの中でも、あなたが一番私を気にかけてくれていたわね」

彼女のことだけ、本心から告げた麗凜の言葉で、桃鈴は嬉しそうに頬を染めた。

「まあ 姫君……初めて名を呼んでくださいましたね！ 勿体無いお言葉、有難き幸せにございます」

素直に言われて、麗凜は少し居心地の悪い気分になった。

全ては偽りの対応に過ぎないのに。夜が来れば、双剣を殺すために自分は動く。そして、その意味するところは この双龍国を倒すことだ。

国を失えば、一番に被害を被るのは民であるのだ。

何の非もない、桃鈴のような人々が。

戦火に戸惑い、悲鳴を上げる彼らの顔が目に見えかんだ気がして、麗凜は思わず瞳を伏せた。

彼女たちにも、大切な家族も、生活もあるというのに。奪われる

辛さは誰よりもわかっているはずの自分が、今度はそれを奪う側に立ってしまふのだろうか。

考えた途端、その罪の重さにためらいを覚える。

「どうかなさいましたか、姫様？」

無邪気な桃鈴の声に、麗凜は固く瞳を閉じてから、思い直したように顔を上げた。

「いいえ、何も 何でもないので……」

そうだ、祖国を滅ぼされたのは自分のほうではないか。そんな国の人々に、何を同情するというのか。

迷いなど、必要はない。大切な人を失う苦しみを負わされたのは、自分なのだ。もう二度と、味わいたくなどない。ならば、すべきことは決まっている。

全ては周季のために、そして自分の恋と命のために。

何度も胸に刻んだはずの決意を、もう一度繰り返して、麗凜は窓の外を見やった。

青い木々の葉が、何も知らずに爽やかな風にそよいでいた。

\*\*\*

「父様、父様！ あっ……」

まだ長い裾を踏んで転びかけた幼い少女を受け止めたのは、優しい父親だった。その頭上に輝く王冠と、指に光る美しい紫の宝石が、彼がこの国で最高位にあることを示している。

「まったく麗凜は そうやって走り回っているから、すぐに転んだりするんだぞ」

口ではそう言いながら、抱き上げてくれる手は温かい。麗凜は笑

つて、広い父の胸に顔を埋めた。彼女の黄色い下衣についた草をはらってくれるのは、困ったように微笑む母だ。

『まあまあ、こんなに汚れてしまつて。また草原を駆け回つていたのね。朝から孔蓮こうれんが探し回つていたわよ』

『だつて母様、珍しい鳥が来ていたの。追いかけていたらつい……きつと南のほうからやつてきたんだわ。どんな国から来たのかしら。ああ、私が鳥とお話できたなら色々聞けたのに』

悪びれもせずに母親に訴えて、麗凜は両手を組んでうっとりと言つてみせる。その様子に苦笑しながらも、両親は責めもしなかつた。麗凜様！ ようやく見つけましたぞ！ いやはや、あちこち捜し回つたら、結局こちらにいらしたんですな』

息を切らしながら飛び込んできたのは、白い髭も立派な老教師だつた。途端に渋い顔になるのは麗凜だ。知らない国のことを学ぶのは嫌いではないけれど、この老教師の授業はどうにも退屈で仕方がなかつたから。

『だつて、今日の授業は午後からのはずでしょう？』

唇を尖らせる麗凜に、父が笑つた。

『ああ、そうか 昨日伝えておくのを忘れていた、この父が悪かつた。麗凜をあまり叱らないでやつてくれ』

『まつたく 陛下は麗凜様に甘くていらつしやるのだから。伸び伸びとお育てになるのはよろしいが、王女様としてはお転婆に過ぎますぞ。そんなことでは、この孔蓮、気が気でなくてのんびり隠居してもおられませんわい。ああ、持病の腰痛さえなかつたら、まだ私がお教えしなくてはならないことが山ほど……』

『隠居？ 隠居つてどうということ？ じゃあ勉強はどうなるの？ 腰をさすりながらもまだ話し続けようとする孔蓮の言葉をさえぎつて、麗凜が父親の足元でびよんびよんと跳ねる。』

『麗凜様！ まだお話は終わっていませんぞ！』

無邪気な王女を困んで笑い合う両親と渋い顔の教師。その輪から外れたところで、遠慮がちな笑い声がもれる。気づいた麗凜がそち

らを見ると、笑った人物はあわてて口元を押さえた。

『申し訳ございません　あまり微笑ましくて、つい。失礼をお許してください』

長髪を背で束ねた青年が、礼儀正しく両手を合わせて頭を下げる。知らない若者に見られていたことで、麗凜は知らず頬を染めた。父親の衣装の裾を掴んで、背後に隠れるようにする少女に、青年は優しい笑顔を向けた。

『初めまして、麗凜様。孔蓮様に替わり、この度教育係を拝命いたしました、周李と申します。これからどうぞ、よろしくお願いいたします』

『周李は、一番の若さで科挙の試験に合格し、第一文官になられた、優秀な先生なのだよ。学問だけではなく、弓や剣、馬術にも秀でておられるようだから、お転婆なお前の教育係にはぴったりのお方だろう。よく言う事を聞いて、勉強に励みなさい』

穏やかな青年の笑みと、父の優しい瞳を交互に見ていた麗凜は、しばらくして父の後ろからおずおずと歩み出た。そのまま周李に近づくと、しゃがんでくれたところへ、そっと耳打ちする。

『ねえ、空はどうして青いと思う？』

突然の問いに、周李は瞳を丸くしながらも、面白そうな顔で麗凜を見つめ返した。その優しい反応に励まされたかのように、麗凜は耳元で続けた。

『雨はどこから来るのかとか、鳥はどうして飛べるんだろう、とか、そういうことを聞くといつも孔蓮は笑うの。そんな馬鹿なことを考えていないで、もっと国の歴史とか、地理とかを勉強しなさいってあなたもそう思う？』

何事かと見守る両親と老教師に気づかれぬように囁いた彼女に、周李は静かに微笑んでみせた。

『いいえ。当たり前だと大人が感じることに、疑問の目を向けるのは大切なことだと私は思いますよ。そういうところにこそ、学問の芽が隠れているものです』

真面目に、ちゃんと小声で答えてくれた彼を見て、麗凜はたちまち顔を輝かせた。

『じゃあ、鳥になって、世界中を見てみたいって言っても、笑ったりしない？』

わくわくと見上げる少女に、周李は瞳を細めて、しっかりと頷いた。

『もちろん。素晴らしい夢だと思いますよ。私だって、叶うならばそうしたいですね』

周李の言葉を聞いて、麗凜は嬉しそうに頬を染め、両手を合わせた。

『これから、仲良くしてね 周李。あなたとは、とっても気が合いそう！ いつか一緒に、鳥になって世界中を旅するの。いい考えでしょう？』

にっこりと笑った後、毅然と背を伸ばした麗凜は、まっすぐに彼を見て、その手をしっかりと握りしめる。瞳を一瞬驚いたように瞬かせた周李は、やわらかい笑顔を浮かべてくれた。

『ええ、素敵ですね 』

微笑みあう二人を、父と母が王座で優しく見守っていた。

幼き日の自分の姿を、どこか遠まきに麗凜は見つめていた。

ああ、あれは初めて周李に出逢った日の光景だ。

少しぼやけていた記憶が、目の前で繰り広げられて、くつきりと鮮やかになっていく気がしていた。懐かしくて、ただ幸せだった頃の自分を思い出して、麗凜の瞳は泣き出しそうにゆがむ。

周李は言葉通り、どんなに小さなことを訊ねても、決して笑いはしなかった。

足元に生えた草のこと、飛び交う虫のこと、そして空の果ての話 日々の授業よりも、そんな話のほうに心に残っている。いつで

も周李は自分の話をちゃんと聞いてくれた。まるで優しい兄のように、あるいは友達のように、そしていつしか　彼は麗凜にとって、かけがえのない人になった。

『どこまで行かれるのですか、麗凜様』

いつものように自分の後を困ったようについてくる周李。そうやって追ってきてくれるの

がわかっていいるから、麗凜は安心して足を速める。

『こつち！　もうすぐよ』

駆けていく麗凜の足取りは軽い。この前散歩の途中で見つけたとっておきの場所を、周李にも見せてあげたかった。

『これは……またたくさん咲いていますね』

驚いたように笑ってくれた周李に、麗凜は得意げに微笑む。

満開の風麗花が咲き誇っていたあの場所には負けるけれど、これで自分を喜ばせてくれた周李へのお返しが出来たような気がして。

麗凜は満面の笑顔でその場に膝をつく。

不器用な手つきで黄色い花を摘んでいく。確かこうするはず。

若い女官に教えてもらった作り方、昨夜忘れないように練習もした。必死に両手を動かす彼女の後ろで、周李が微笑ましげに見ていることなど気づかずに。

『ほら！　できたわ』

嬉しそうに掲げて見せたのは、花冠。一面に咲いた優しい蒲公英たんぽぽの風情は、周李にぴったりだと思ったから。麗凜が頭に載せた黄色い輪　ところどころ危うげなもの、なんとか編まれたその冠に、周李はにっこりと触れた。

『お誕生日おめでとう、周李』

新年を迎えると同時に年齢は数えるのだが、それとは別に彼が生まれた特別な日をお祝いしたかった。父にねだって何か贈るのでは、自分の心が伝わらない気がして、麗凜が一生懸命考えた精一杯の贈り物だった。

周李は心底驚いたような顔をして、それからとても嬉しそうに笑ってくれたのだ。

『ありがとうございます　麗凜様』

優しい優しい風景を麗凜は眺める。風の吹き渡る草原を、遙かに見える自国の王宮を、彼女は微笑みながら見つめていた。

そうだ。あの日は確か、周李が少し元気がないような気がして、余計に喜ばせてあげたかったのだ。いつも優しく穏やかで、端正な彼は女官たちにも人気が高かった。けれど同時に、彼の出自をあれこれと噂する者たちが多いことも麗凜は知っていた。

父親のいない彼のことを、どこかの高貴な方の落とし種であるのだとか、それとも他国の王族ではないのかとか、根も葉もないことを言う人々　しかし一様に言われるのは、母親の身分が低いことだった。本来ならば王宮に勤める身分ではないはずだという者の多くが、若く有能な周李を妬んでいるのだと、仲の良い女官が教えてくれた。

そんなことを全く気にしない自分にはわからない大人の事情が、王宮には渦巻いていて、その日も周李は何事かに沈んでいるように見えたから　笑顔を取り戻してあげたかったのだ。　麗凜の気持ち伝わったのか、そうでないのかわからないものの、周李は明るさを取り戻したかのようにだった。

遠い日の、かすかに甘い想い出　それがいつしか、周囲に黒雲が立ち込めるがごとく、崩れていく。

はっと辺りを見回す麗凜の目前で、夢の中の二人は装いを変えていくのだ。

うつらかな春の光景が、寂しくさびれた冬に　優しかった時間が、いつの間にか暗い夜へと変貌し、そして見つけたものは、恐ろしい煙と炎。

緊迫した二人の顔、倒れる味方の兵。気づいていない二人の周り

を、いつの間にか取り囲むように近づいている赤い旗印。

ああ、これは……！

息をのむ麗凜をよそに、止めようもなく時間は過ぎていく。  
あの悪夢の瞬間がやってくるのがわかる。

だめよ、だめ！ 逃げて、周李……お願い！

必死で叫ぶ麗凜の声は何かに阻まれたように、声にならない。知らずに背を向け、馬に跨った周李の背中めがけて、鋭い矢が飛んでいく。

麗凜の願いも空しく、愛しい人の背にそれは突き刺さり、そして真つ赤な血で染めていく。

喉が破れるほどに泣き叫んでも、何一つ言葉にならなかった。

見守る先で、もう一人の麗凜も悲痛な叫びを上げていた。

飛び起きた麗凜は、いつの間にか自分が寝台にいたことを知った。太陽がまだ落ちてはおらず、まどろんでいたらしいのが、どうやらそんなに長い時間ではないことにほっとした。心臓が激しく脈打つていて、嫌な汗でべつとりと背中濡れていた。

「ああ……夢」

夢の中の時間は、なんだかとても長かった気がしたのに、目覚めてみると儚い一瞬の幻だったような不思議な感覚に包まれる。それでも、周李の背を染めた血の色と、心臓が凍りついたあの瞬間を思うと、いてもたってもいられないほど震えが走った。

もうすぐ、もう間もなく宴は始まってしまふ。

双剣を倒せる機会が、もう目前に迫っている。

そのことに喜ぶよりも、夢の中での恐怖が蘇り、麗凜は不安に落ちていく自分の心を止められなかった。

もし、失敗したら……。

自分の命など、どうなっても構わない。けれど、それが周李の、

鳳昇の命であれば話は別だ。彼が周李であろうとなかろうと、既に自分が彼の命を失うことには耐えられないことはわかっていた。嫌な感覚を振り払おうと目を固く閉じても、暗闇に映るのは彼の血の色。倒れていく、体。

「だめよ……そんなことは、絶対に……」

震え出す手のひらを必死に握り締める。それでも消えない残像に、麗凜はついに立ち上がっていた。

\*\*\*

「……どうしたのです、一体」

辿り着いた水龍宮の一室。飛び込んできた麗凜を迎えた鳳昇は、驚愕に目を睜っていた。

「周……鳳昇」

言葉が思い浮かばずに、ただ名を呼んだ麗凜を、慌てた様子で鳳昇は部屋の奥へ案内した。辺りを見回して、鍵をかける。

「お一人でこんなところへ来られるとは 危険だとは思わなかったのですか。ちょうど見張りの兵の交替の時間だったからよかったものの、万が一誰かに見咎められていたら……」

声をひそめてそう言われて、ようやく止まったままだった麗凜の頭も動き出した。

「……ごめんなさい、でも……！」

まだ鮮やかに胸に残る恐ろしい夢に、麗凜の顔色は悪い。それに気づいたように、鳳昇は彼女を長椅子へと促した。

「とにかく、お茶でも入れましょうか」

落ち着かせるために言われたであろう言葉に、麗凜はためらいがちに首を振った。長居をしてはいけないことぐらい、さすがにわかっているつもりだった。

話をしようと思うものの、唇が震えて、何から話せばいいのかわ

からない。

動揺した麗凜に、困ったように軽く息を吐いた鳳昇は、そつと彼女の手を握った。

「どうか、落ち着いて。ゆっくりと息を吸って……何があったのか、お話ください。そんな様子でいられては、私のほうが落ち着かない」苦笑する鳳昇の温かな手に、やっと麗凜の呼吸も落ち着いていく。それと同時に、どきどきし始める自分の心臓が気恥ずかしい気分になった。そんな気持ちを表に出さぬよう、麗凜はなんとか口を開いた。

「あの……私、不安になつて」

出てきた言葉はまるで幼い子供のように、ためらってしまう。けれどそれ以外に今の心を表す言葉はなかった。

鳳昇はただ手を離して、向かいの椅子に腰を下ろす。そのまま続きを促すように黙っていた。

「あなたが、死んでしまう夢を見たの。だから、怖くなつてもたつてもいられなくなって、ここへ……」

少し頬を染めながら、ぽつりぽつりと言葉を繰り出す麗凜。何を言いに来たのか、既に自分でもわからない。ただ、不安だったのだ。それだけでこんなところまで来てしまった。無事にたどり着けたことが、幸運だったとしかいいようのない状況で。

ただ沈黙を守っていた鳳昇は、そのまま口をつぐんだ彼女を見て、腕を組んで溜息をついてみせた。

「それで？」

「それで……あの、だから……気を付けて、ほしいの。私、万が一でもあなたを失うことは耐えられない。あなたまで、失いたくない。双剣のことは憎いわ。でも あなたの命にはかえられない。お願い、どうか……無理はしないで」

戸惑いながらも、自分の気持ちが抑えられずに、麗凜は祈るような思いで告げた。両手を合わせて、鳳昇を見上げる。そんな彼女を無表情のまま見つめていた彼は、しばらくして、わずかに皮肉げな

笑みを浮かべたのだ。

「何か、勘違いなされているのでは？」

冷たく、静かに言い放たれた言葉は、一瞬理解ができないものだった。

言葉を失っている彼女に、更に鳳昇は笑ってみせた。

「我々は、我々の目的のために動くのです。あなたの為に、双剣を倒すのではない。目的のために、私が命を落とそうと、そうでなからうと、あなたにとやかく言われる筋合いはない。それがわかったら、さつさとお帰りになることですね。あなたがここにいては、我々の邪魔になるのですよ。あなたは、あなたのなさるべきことだけに集中していただきたい」

最後には笑顔すら消して、きつぱりと言葉を終えた鳳昇の瞳を、麗凜はただ見開いた目で見つめ返していた。言われた言葉が、心の中に一つ一つ入ってきて、鋭い刃で突き刺されているような気がした。返事もできないでいる麗凜の体を扉のほうへ連れて行った鳳昇は、そのまま彼女を見もせず背を向けた。

「さあ、誰にも見られぬうちにお戻りを　私から言うことは、もうありません」

時が止まったかのようなだった麗凜の耳に、水龍宮の水仕掛けの音が聞こえてくる。絡み合った金の龍が夕日の光にきらめいているのを見て、ようやく麗凜は足を動かした。戻らなくては、そう理性ではわかるのに、再び振り返って目にした鳳昇の背に、矢が突き刺さる幻が見える気がして、麗凜は頭を振って駆け寄った。

冷たく向けられたままの背中に、必死でしがみつく。自分が何をしているのか、もう考えられなかった。

「どうか　お願い。無事でいて。私がこんなことを言う立場ではないといわれても仕方ないわ。でも、そう願わずにはいられないのだから……死なないで」

あふれた涙は、振り向かない鳳昇には見えないから　せめて気づかれないように、と必死で麗凜は涙声にならないよう、声を抑え

た。囁くようになった言葉は、彼の心に届いたのか、それきり自分で扉を閉めた麗凜にはわからなかった。次から次に落ちてくる涙を拭いながら、麗凜は急いだ。誰にも見つからないよう、決して彼の迷惑にならないよう。 。  
駆ける麗凜の背後で、中庭の池で泳ぐ水鳥が、ぱしゃりと音を立てた。

## 五、復讐と恋の炎は揺れ

夜も更けて、続々と集まる各国の使者たちと、あふれるほどに並べられた豪華な料理で、水龍宮は賑やかに彩られていた。

じんわりと油の染み出る、あひるの丸焼きに、とろりとした甘酢あんをたっぷりかけた白身魚、大根や人参を美しく彫った不死鳥の姿。次から次へと振舞われる大皿の料理からは、食欲をそそる匂いが漂い、添えられた季節の果物は瑞々しい。

食事を楽しむ彼らの前に披露される、踊り子たちの華麗な舞いと珍しい見世物で、宴も盛り上がりを見せている。まさに贅を尽くした宴会は、使者たちの貢物に対する感謝をうたってはいるが、双龍国の力を見せ付けるためのものだ。近隣を囲む国から訪れた彼らに對しての、牽制とも言えるだろう。

そんな思惑が渦巻いているとはいえ、華やかな宴会は楽しげに続いていた。

各自の前に置かれた朱塗りの膳には、胡麻の焼き菓子や甘い餡入りの饅頭が食後のお茶と共に並べられていたが、もっぱら酒のほうが進んでいるようだった。

たわいもない会話を繰り返す使者と双剣。もう何度目かわからぬ視線が、麗凜に注がれた。

「誠にお美しいご婚約者様であらせられる 双剣様とよくお似合

「いでございます」

「ご正妃様をお迎えになられて、これからますます双龍は発展されるでしょうな」

使者たちに言われ、まんざらでもないように双剣は髭をさすった。彼のほうも、いつにも増して派手派手しい衣装を着ている。金や銀のぎらぎらとした指輪が輝いて、いやらしい表情が更に目立って見えた。

麗凜にいたっては、ここぞとばかりに飾り立てられ、毒々しいほどの赤い衣装と大粒の真珠の首飾りが妙に重く、息苦しい気さえする。これぞ双龍の宝珠だ、まるで天女のように、などと口々に褒め称える使者たちに、皮肉な思いを感じつつも、麗凜は精一杯の愛想笑いを浮かべていた。決して本心を　これから行う企みを気取られぬよう。

ちらりと盗み見た先で、鳳昇は会話に相槌だけ打ちながら、微笑んでいた。

「さあ、陛下　お酒をもっとお召し上がりくださいませ」

麗凜が勧めた酒を、機嫌よく双剣は飲み干した。

酒瓶を持つ彼女の手が少し震えていたことなど、既に赤い顔をした双剣には見えていないようだった。

宴が始まる前に、周李にもらった薬を入れたその酒　誰にも気づかれず双剣が無事飲んでくれて、麗凜はほっとしていた。

これで　これで彼は、そのうち眠ってしまうはず。

そうすれば、寢所に周李たちが押し入った時、簡単に殺せるのだ。彼の寢所を守る衛兵たちにも、周李の他の手勢が薬を盛る手はずとなっていた。

もうすぐだ。もうすぐ、この憎い男の命は消える　！

いざその瞬間が迫っていると思うと、麗凜は体中に震えが走るのを止められなかった。水龍宮での鳳昇の言葉を思い出すたび、まだ胸が痛みはするものの、身を切られるようだった先ほどよりは、少し落ち着いてきていた。冷静になってみれば彼の言い分は正しいの

だ。きつとあんな夢を見たから、不安にかられて取り乱してしまっただけ。彼が周李であるのか、それとも別人なのか、思い悩むのはもうやめた。今、ここにいる彼は彼でしかないのだから。

だから自分は、せめて彼の役に立つ。そう決めた。彼の無事を祈る心までは止められはしないけれど。

涙で少し腫れていた目元も、桃鈴や他の女官が丁寧化粧を施してくれたことでなんとかごまかせてほっとしていた。とにかく役目は果たした。あとは、薬が効いてくるのを見守るだけ。麗凜はどきどきしながら、双剣の様子を見つめていた。

しかし、いつまでたっても双剣は、眠そうな様子一つ見せない。

おかしい……そろそろ薬が効いてもいい頃なのに。

麗凜が疑問に思うのも露知らず、双剣は平気な顔で使者たちと雑談を交わし、酒を飲み干し続けている。

不安な面持ちで麗凜が視線を送るのは、宴に同席している鳳昇の顔。こちらも、まるで何事もないかのように平静な表情を崩してはいなかった。

もしや薬が効かなかったのだろうか。そんな麗凜の動揺は、宴が終盤を迎える頃には頂点に達していた。

そんなこのままでは鳳昇が寝所に忍び入った時、万が一にも返り討ちにされるかもしれない。双剣という男は、蛇のように油断のならない男なのだ。

そう思った途端、麗凜は再び恐ろしくてたまらなくなった。

いやだ、またあの悪夢が繰り返されるなんて。必死で押さえつけたはずの不安がかま首をもたげる。目の前で繰り広げられた惨劇が頭に浮かんで、麗凜はたまらずに双剣の腕を掴んでいた。

「どうした、麗凜よ。顔色がよくないようだが」

麗凜の真つ青な顔色に気づいたように覗き込んでくる双剣。その瞳を必死で見上げて、麗凜は口を開いていた。

「陛下　あまり気分が優れません。非礼であることは承知の上でございませう……宮に下からせて頂きとうございませう」

抑えきれない手の震えを、双剣は言葉通りに取っただけ、あわてたように頷いた。

「そうか、構わぬ。下がるが良い。誰か、麗凜を宮に」  
近くにいた女官に命じかけた双剣の手を、麗凜は素早く握った。驚いた顔で振り返った双剣に、麗凜は声をひそめて囁いたのだ。

「いえ　後宮ではなく、陛下の寝所に……」  
見る見るうちに双剣の表情が変わる。酒のために少し染まった頬で、寄りかかるようにして告げた麗凜の言葉の意図は、間違いなく伝わったようだった。

黙って女官に何事かを指示した双剣は、上機嫌で使者たちに宴の終わりを告げる挨拶を始める。

双剣に連れられていく麗凜が一瞬だけ見やった先で、鳳昇は氷のような硬い表情のまま、静かに見つめ返しているのだった。

初めて入った双剣の寝所　寝台を灯すわずかな光だけ残された部屋は薄暗く、静か過ぎるほどだった。

衛兵も女官も下げられたことは、今からやってくる鳳昇たちにとっては都合がいいはずだ。

我ながらうまくやったと思う反面、万が一鳳昇が来なかったら  
そう考えると、心臓が縮まる思いだった。

「麗凜よ、もっと近くへ」  
そう言いながら、自ら衣装の腰紐を緩める双剣の手つきと、自分を見つめる瞳に、心底から嫌悪感が走る。

どうしよう、本当にこんなことをして……無事で済むものだろうか。

鳳昇が来るのが少しでも遅れたなら、もう自分はこの男の毒牙に

かかることになる。

避けられずに寝台に腰を下ろした麗凜のもとへ、双剣は歩み寄ってくる。

高く結び上げられた麗凜の髪　束ねていた赤い髪飾りを外されて、黒く艶やかな流れがあらわになった。

「この時を待っていたぞ　愛しい麗凜」

首元に唇を押し付けられた時、麗凜はどうしようもない恐怖で動けなくなった。

いや……いやだ。こんな男に触れられるのは……！

今まで必死で演じてきた『女』の仮面が、本能的に外れていく。いくら婚姻が許された年であるとはいえ、まだまだ麗凜は幼い少女でしかなかった。

愛しい人のために、全てを覚悟して臨んだはずの演技も、何も考えられなくなった。

「いや　やめて……離して！」

突然叫んだ麗凜に、双剣は瞳を見開いた。それでもすぐに、気にもせぬように彼女を押し倒したのだ。

「今更何を……誘ったのは、そなたのほうだろう。もう遅い　いくら抵抗しようと無駄だ。この部屋には誰も近づけぬようにしたからな。哀れな麗凜よ　何を泣く？　恋しい男のために必死だったようだが、あきらめるのだな。既に手は打った　風彩からの使者には刺客を差し向け、無事にこの王宮を出られぬようにしておいた」

「そんな……！」

たちまち顔色を変えた麗凜を冷たい目で見据えた双剣は、ふんと鼻で笑ってすらみせた。

「この双剣が、小娘の演技ごときに騙されるような愚か者だと思っただか？　半年の間、何に対しても無反応だったお前が、風彩の使者には執着を示した。それが何を意味するのか、考えるまでもなかったわ。あの夜、私が射抜いた男であろう、お前が待っていたのは。さすがに顔は覚えていなかったが、お前の反応で察した。だからあ

の男を調べさせ、泳がせておいたのよ。残念ながら、あやつがどのような人物かは調べがつかなかったが、お前の恋しい男と同一人物かどうかなど、今更どうでもよい。怪しい動きを見せる輩は始末する。それが王者の鉄則だからな。泣いてもわめいても、あやつは来ぬぞ。今頃は既に息絶えているころだろうからな。お前が愛した、あの男のように」

言い捨てて、高らかに笑った双剣を食い入るように見つめて、麗凜はただ、首を振っていた。

「そんなこと　嘘よ……そんな、ひどい　」  
何を呟いているのかさえ、わからない。涙で視界がぼやけて、迫ってくる双剣の顔が見えなくなった。

うまく働かなくなった頭よりも先に、衣装が裂かれる音と押し掛かっってきた双剣の体重に、体が反応した。

「いや……助けて……周李　！」  
声の限りに麗凜が叫ぶのと、鍵がかけられていたはずの寝所の扉が力いっぱい開くのが同時だった。

顔を上げた双剣の前に静かに剣を向けたのは、待ちわびていた愛しい人だったのだ。

「お前は……そんなはずは！」  
あきらかな動揺を見せた双剣に、鳳昇はおどけたように一礼さえしてみせた。

「残念ですが　こちらも簡単に死ぬわけには行きませぬのでね。差し向けられた方なら、私の仲間がその辺に転がしておりますよ」  
にやりと笑った彼の顔を、双剣は憤怒と共に睨みつけた。

寝台の枕元に忍ばせておいたらしい剣を素早く取るうとした双剣の動きを、鳳昇は見逃さなかった。

流れるように先回りして、双剣の腕を手にした剣で打った。そのまま間髪をいれずに彼の喉元へ、光る切っ先を突きつけたのだ。

「ご覚悟を　もし抵抗なさらないと仰るなら、命だけは取りませ  
ん」

冷静にそう言われて、双剣はゆっくりと鳳昇を見やった。

「何が　望みだ」

かすれた双剣の声に、鳳昇は微笑を浮かべる。

「もちろん、この国です。血を流すのはできるだけ避けたい　無駄に民や兵の命を落とすことは好ましくありません。あなたが大人しく応じてくださるのなら、属国として、あなたの処分はできるだけ考慮してもいいと、我が王は申しております」

鳳昇の言葉に、双剣はたちまち乾いた笑いをもらした。

「何だと　？　新参の小国ごときが、この双龍を属国とするだと？　随分大きく出たものだ。例え私の命を取ろうと、我が軍がお前たちのような小国など、すぐに蹴散らすだろうよ」

喉元に突きつけられた刃も気にせぬように、双剣は嘲りを隠そうともせず笑い声を上げた。

それでも鳳昇は、気にした様子もなく笑い返してみせたのだ。

「さあ、それはどうでしょうね　あなた亡き後、果たして軍が忠誠を尽くすかどうか、私には疑問ですが。民がどちらを選ぶのか、我が王の度量に懸けるとしましょう。いずれにしろ……ご自身が亡くなられた後の心配は、なさらずともよいのでは？」

穏やかにすら見える微笑を瞬時にして凍らせて、鳳昇は剣を両手で持ち直した。今にも双剣の喉を突きそうなほどの、恐ろしい気迫が見えるようだった。

ゆっくりと、双剣の喉が上下する。

時が止まったような寝所の空気を動かしたのは、窓を揺らす夜風の音だった。

双剣が、気迫に負けたかのように瞳を閉じたのだ。

「わかった……私とて、命は惜しいからな。そちらの言うことに応

じよっ」

再び開けられた時、ずる賢く光った彼の瞳に、麗凜は眉を寄せた。やはり、この男はその程度の男なのだ。人の命はあれだけ残忍に奪っておいて、いざ自分の番が来たら、必死で生き残るつもりなのだから。

改めてわきあがる憎悪の中で、麗凜はそれでもほっとしていた。これで、鳳昇の命に危険は及ばない。無事に目的を果たしたのだ。この男を殺せなかったのは残念でも、双龍という国は滅びるのであるから。

胸をなでおろす麗凜の前で、鳳昇も剣を下ろした。懐から取り出した縄で彼を縛り始める鳳昇の表情も、幾分安心したように見えた。

そして縛り終えた鳳昇が、その瞳をわずかにそらした瞬間だった。どうやって解いたのか縄のゆるんだ隙に、双剣が一瞬の動きで、枕元の剣を掴み、鳳昇の背に切りかかったのだ。

鳳昇の衣服が裂け、血が飛び散る。まるで三日月のような形の刃の跡が、見開かれた麗凜の瞳に映った。

「周」  
叫ぼうとしても、まともに声を出すこともできない。喉に張り付いたような麗凜の悲鳴は、彼がゆっくりと倒れてから初めて、部屋を切り裂くように響いた。

「嘘……嘘よ、こんなの　周李……いや　！」  
麗凜の嘆く声にも、双剣は嫌らしい笑みを浮かべたのだ。

「は……はは、そら見たことか。せいぜい卑しい輩など、この程度のものなのだ。わかっただろう、麗凜」  
固まっていた体をなんとか動かして、倒れた鳳昇のもとへ駆け寄

った麗凜に、双剣は勝ち誇ったような声で言つてのける。見下ろしている双剣を、麗凜は震えながら睨みつけた。

「よくも……よくも、周李を　　！　許さない、絶対に……！」  
咄嗟に鳳昇の剣を手にとって、立ち上がった麗凜を見ても、双剣は眉一つ動かさなかった。

「剣の扱いなど知らぬ小娘が、私を殺すことができると思うのか？　できるものなら、やってみるがいい！」

笑いながら叫んだ双剣に、麗凜が憎しみに燃えた瞳で切りかかるうとしたその時。

目にしたものに、麗凜の動きは止まった。

「……それ、は」

信じられぬように麗凜が見つめるのは、双剣の手に行っている、大刀。嫌な光を帯びたその刃ではなく、彼が握る柄のほうだった。

戦闘に使うには、不似合いなほど美しい七宝細工　柄を飾るその模様は、麗凜にとって、確かに見覚えのあるものだった。

麗凜の視線に、双剣はふてぶてしい笑みを浮かべた。

「これか。懐かしいであろう、お前の銀粧刀の鞘から細工させ直したものだ。あのままにしておくには、惜しい美しさだったからな」  
「どういふ神経でこんな言葉を言い放っているのだろう。麗凜は、得意げにその細工を見せてくる双剣に、震えが走るのを感じた。憎しみよりも、心底からおぞましかった。

しかし、それだけではなかったのだ。七宝細工の中心にはめられたものを、双剣は愛しげに撫でてみせたのだ。

「まあ、大して価値もない国だったが　これを手に入れたのが、一番の収穫だったな。双龍では産出しない宝石だ。何より高貴な美しさが気に入った。峰陽にばかり採掘権があつたのでは、不公平というものだろう」

言つて彼が陶醉するかのように見つめるのは、大粒の紫水晶。それはまさに、麗凜の父が身に付けていたもの　山の神の怒りを買わぬようと、最小限の採掘だけが許され、儀式にのみ使われてい

た、峰陽の至極の宝石だった。再三に渡り、他国からの申し出があったのを断っている、と生前話していた父親を思い出す。

「まさか……その石を手に入れるためだけに、峰陽を滅ぼしたというの」

今、聞いたばかりの事実を、信じたくない思いで問い返した。小さく、消え入るような彼女の声も、しっかりと双剣は耳にしたようだった。それがどうした、とばかりににんまりと笑って言ったのだ。「そうだ。大人しく我々に譲ればよかったものを　まさに無駄死にだというわけだ。間抜けなことよ」

高笑いを、麗凜は表情を失ったまま聞いていた。双剣の得意げな独白は続く。

「長年、あの険しい山越えで皆、躊躇しておったようだがな。そのようなもの、兵力を大幅に失うことを厭わねば、簡単なこと。何人死のうが、また補充すればいいのだからな。あえて油断の大きい、冬に奇襲をかけてこようとは、誰も思わなかっただろうよ。それに麗凜、お前とて同じことよ。その類まれなる美しさがなかったら、とつくに私の剣の前に倒れておったわ。それがわかれば、もう少し従順になるのだな」

自国の兵を、人の命を、何とも思わぬ異常な双剣の言葉に、麗凜はぐらぐらと周囲が回りだすような感覚を覚える。足元がふらつく。冷たいはずの手に噴き出した汗で滑りそうな鳳昇の剣をなんとか握りなおす。倒れた鳳昇の背中　辺りに飛び散った血、美しい七宝細工、紫水晶の輝き　全てが頭の中を駆け巡った。

「双、剣……覚悟　！」

麗凜が、操られた人形のような動きで剣を振り上げ、足を踏み出した、その瞬間。

扉が開いて、一気になだれ込んできたのは、双龍の衛兵たちだった。赤一色の鎧に身を包んだ彼らが現れたのを見て、双剣は安心したように息を吐く。

思わず振り上げた剣を下ろした麗凜を突き飛ばして、双剣は兵た

ちのほうへ歩き出した。

「遅かったではないか。この男を早く連れて行け！ それにこの女もだ。婚礼まで、一步も外へ出すなと皆に命じておけ」

顎で麗凜のほうを示した双剣が、兵たちの間を通ろうとして、驚いたように動きを止めた。

「何だ……お前は」

赤い兵たちの間、中央にいつの間にか佇んでいた人影に、麗凜も目を上げる。

そこに見つけた人物に、双剣は怪訝そうな目つきで、気が抜けたような顔をした。

「お前は確か　麗凜付きの……このような所で、何をしておる」  
そう、そこに立っていたのは、まぎれもない麗凜の女官、桃鈴だったのだ。

いつもの衣装で、艶やかにさえ見える微笑みを返した桃鈴は、その懐から、静かに光るものを取り出した。

そして目にも見えぬほどの素早さで、双剣に飛び掛った　そう思った瞬間、双剣は倒れていた。苦悶の表情すら浮かべられなかったのか、双剣は間の抜けた顔のまま全身を血に染めて、息絶えていたのだ。

息を呑んだ麗凜の前で、桃鈴はいつもの顔で振り返り、いたずらっぽい笑顔を浮かべて、自分の衣装を一気に剥ぎ取って見せた。女官の服の下から現れたのは、青い鎧。そして彼女がおもむろに手をやった長い髪の下から、短く切りそろえられた褐色の髪が姿を現す。鬢かづららしき髪を床に投げ捨てた桃鈴は、今までより少し低めの声で笑ったのだ。

「もうよいぞ、鳳昇。いつまでも起き上がらぬなら、死んだものとみなして捨て置くが、それでもよいか」

あっさりと言われたその内容に、麗凜が弾かれたように振り向いた目の前で、ゆっくりと鳳昇は立ち上がる。

何でもなさそうな顔で笑った彼は、桃鈴に一礼さえしてみせたの

だ。

「ひどいことを　できるだけ楽しませてくれと仰ったのは、あなたではありませんか。風鳴様ふうめい」

「そうだったかな。過ぎたことはすぐ忘れることにしているんでね」  
肩をすくめた後、鳳昇の背中を検分する桃鈴　風鳴と呼ばれた彼女、いや彼女なのだろうか　その手が捲った衣装の下には、無傷の素肌が見えた。驚愕に目を瞠る麗凜をよそに、風鳴が床に落ちた布の切れ端のようなものを手に取り、笑う。

「やはり山羊の血を忍ばせたのが、効果的だったかな。派手に嘔き出したものだから、双剣の奴、手ごたえもなかったことに気づかなかったと見える」

衣装から取り出した布で無造作に血の跡を拭きながら、鳳昇も皮肉げな笑みを浮かべた。

「所詮はその程度の輩だった、ということですね」

明らかに先ほどの双剣の言葉を揶揄した返答で、背後の兵たちからも笑い声上がる。兜かぶとを上げた彼らの素肌が、浅黒いことに気づいて、麗凜はいよいよ手にしていた剣を落とした。

その甲高い音に振り向いた風鳴が麗凜に笑いかけた。不思議なことに、桃鈴だと信じていた頃よりも、その瞳に宿る光は精悍なものに思えた。

「そうそう　彼女が、すっかり驚いた顔をしているぞ？　説明はお前の役目だったろう、鳳昇」

あくまで楽しそうに鳳昇に言っただけから、風鳴は麗凜に片手を差し出した。

「ご紹介が遅れて申し訳ありません　僕は風鳴。及ばずながら、風彩国の王子なんてものをやっております」

「　王子、ですって　？」  
信じられないままに呟いた麗凜に、風鳴は子供のような瞳を細めて、彼女の手を握ってみせたのだ。

「驚かせてしまいましたわね　姫様」

最後は女官だった頃の声音まで再現して、風鳴が声を上げて笑う。その姿を可笑しそうに眺めている鳳昇と兵の前で、ついに麗凜は意識を手放したのだった。

がやがやと何か話し声がする。

うつすらと目を開けた麗凜は、ぼんやりしたまま行きかう人々を見ていた。

まだ辺りは薄暗く、夜は明けていないようだ。

少し肌に風が吹きつけてきて初めて、自分が外にいるのがわかった。

野外に張られた天幕のようなところで、笑いあっているのは、浅黒い肌の人々。

「いやはや、まさか王子御自ら、女官になりすまして好機を待つておられたとは。さしもの双剣も、予想だにできなかつたでしょうな」  
野太い声がさも可笑しそうに言う。

「あのようにお若く、少女に成りすますことができるほどのお方だったからこそ成功した妙案ですなあ。風鳴殿下は、他にもおおよそ年のいった我々には思いもつかんような奇想天外なやり方で、草原の民を掌握してこられましたから」

「まったくです。大の大人が、彼一人にいつも驚かされる」

ひとしきり楽しげに彼らは笑った。

それでようやく目が覚めた。

「ここは？」  
あわてて起き上がった麗凜に、にこやかに近寄ってくる兵のような面々。

「ああ、お目覚めになりましたか。大丈夫、ご安心を。ここは王宮の外に張られた天幕です。もう何もご心配なさることはありませんよ」

知らない男の言葉で頭に蘇ってくるのは、先ほどまでの出来事。

倒れた双剣、そして倒したのは。

「戦は……？」

混乱したままに呟いた麗凜は、ふと見回した視界に、どこかで目にした顔が見えることに気づいた。

「あなたたちは……確か、祝いの席にいた」

そう、よく見ると、兵たちに囲まれて笑っているのは、他国からの使者として宴に並んでいた顔ばかりだったのだ。

どうなっているのかと瞳を瞬かせた麗凜に礼をして、彼らは微笑んだ。

「我々は、この双龍を囲む国々からやってきた者です。風彩の風鳴殿とは、前々から同盟を結んでおりましてね」

「そうです、更に言うと、双龍の民の中にも、我々の手の者が潜入済みでして、王宮さえ落とせば、双龍の民には手出しせぬと 既に自由民として解放してありますよ」

「まったく 風鳴殿には驚きですよ。この国を、ほとんど血も流さずにその手の下に置かれたのだから」

「いやいや、実際には自由国として建たせようと、あとは民の自由にするというのだから、支配下というのは違いますぞ。圧政に苦しめられていた民は、かえって喜んでおるそうです」

黙っている麗凜をよそに、楽しみに語り合う各国の男たち。

その会話を聞きながら、ようやく麗凜は納得しはじめていた。

双剣を倒す計画は 既にそんなに前から周到に用意され、万全を期したものだということか。

風鳴という、まるで少女のような幼い彼がそんなにも素晴らしい王子であったなんて。 女官として側に仕えられながらも、

何一つ気づかせなかった彼に、麗凜は驚きと共に笑みすら浮かんでくるのを感じていた。

そして気づくのは、その場に風鳴も周李も見当たらないということ。

「あの……風鳴王子は？ それに 周……鳳昇という名の人はど

ここに？」

そう訊ねた麗凜に、彼らは一瞬笑みをおさめて口を開いた。

「お二人なら、もう発たれましたよ。あなたのご身分は解放され、既に自由の身であるとだけ伝えてくれと」

途端に顔色を変えた麗凜は、急いで立ち上がった。そしてようやく気づいたのは、自分の肩にかけられていた、黒い上着。背中に切り裂かれた跡の残るその衣服が、間違いなく先ほど鳳昇が身につけていたものだとなかって、麗凜は唇を噛んでいた。

最初から、自分を連れて行くつもりなどなかったのだ。

置いていかれたことに裏切られたような気持ちを感じながらも、どこかでわかつていたような、そんな不思議な感覚があった。無意識に握りしめた彼の上着に、何か違和感を覚える。

奇妙な予感のままに、急いで黒い布を裏返す。そして見つけたものに、麗凜は瞳を見開き、徐々に泣き笑いのような表情を浮かべる。鳳昇の上着を抱きしめ、抱えた膝に顔を埋めた。

「麗凜様？」

それでもまだ、敬った呼び方をしてくれる使者の一人に、麗凜は立ち上がり、詰め寄った。

「馬を 馬を用意して下さい、今すぐに！」

天幕にいた全員が、麗凜の言葉に静まり返った。

六、燃やせない過去と想い

静かな丘陵を疾走する馬影が二つ。

並んだ男の背の低いほうが、ふと沈黙を破った。

「本当に　これでよかったのか、鳳昇」

名を呼ばれて、隣で駆ける人影が主を見る。その表情は、悲しいほどに穏やかだった。

「　いいですよ。元より、こうするつもりだった。目的を果たした以上、我々があの場に残る理由もない」

きつぱりと言って微笑む彼の横顔が、月明かりに照らされる。主である少年は、少し黙ってから頭を掻いた。

「それにしても……思ったよりも彼女は良い働きをしてくれたな」  
感心しているようなその言葉に、鳳昇はわずかに眉をひそめる。

「それは　皮肉でいらつしゃいますか、風鳴様」

微妙な表情の変化を敏感に察知したように、風鳴は笑った。

「　いいや。本当に本心だぞ？　まあ、寝所の前で、今にも踏み込みそうになるのを必死で堪えていたお前の蒼白な顔を見ているのは、結構楽しかったがな。しかしまさか彼女があんな思い切った手段に出るとは思わなかった。偽の睡眠薬を渡しただけで、彼女は本来作戦には加える予定はなかったのに　それだけ愛のためには強くなれるということか。なかなか見物だったな、あれは」

飄々とした顔で一人頷く風鳴。今度は明らかに慚然とした顔で、鳳昇は前を向いた。

「　私には、関係のないことです」

低く感情のない返答に、風鳴はあきれたような息を吐いた。

「……あいかかわらず、頑固な奴だ」

それきり黙ってしまった鳳昇に、馬を休めようと指示を出した風鳴は手綱を引いた。

いつの間にやら丘陵を越えて、彼らは青い草地へとたどり着いていた。

目指す東の大地までは、あとわずか。

明日の朝までには悠々と夏营地へ着くことだろう。

目印となる定点の星を見ながら計算する鳳昇の隣で、風鳴は馬の背をねぎらつように撫でている。華奢な体躯、少女と見まごう程の

あどけない顔　その外見と中身は著しく異なる。

先ほど、驚愕の瞳で風鳴を見つめた少女を思い出して、鳳昇は知らず瞳を伏せた。

「鳳昇」

呼ばれて顔を上げると、風鳴が思いのほか真剣な瞳で自分を見つめていた。

「お前は、本当の名すら……私には教えようとしなかったな」

突然何を言い出すのかと瞬きをした鳳昇に笑って、風鳴は続ける。「瀕死の矢傷を負いながらも、強い意志に突き動かされるように私の足首を掴んだ。あんまり凄まじい力だったから、その場に捨て置くにはしのびなかった。ほんの物見遊山のつもりだったのにな」

出逢った夜の話をしているのだと飲み込めてなお、鳳昇は無言でいた。それでも気にせぬように風鳴は伸びをして、草原に歩みを進めた。気取らない騎馬の民そのものの衣服をまとった背中、あの日と同じだった。

「好きに呼べと言ったお前に、私は鳳昇という名を与えた。死の淵からも蘇るほどの強い思いが、かの伝説の鳥を思わせたからだ。現にお前は、見る間に私の片腕として力を発揮した。持ち前の頭脳だけではなく、武術や騎馬の戦闘ですらあつという間に身に付けた。まさに死ぬ気で、といったところかもしれないが。父上も感心なさるほどにな　なんて、少々褒めすぎたか？」

おどけたように振り返った風鳴に、鳳昇はやわらかく微笑んでみせる。

「ええ。私は、そんなにいいものではありませんよ」

純粋な謙遜、ただそれだけではないものがひそかに込められた言葉に、風鳴はいたずらっぽい笑みを返す。

「はたして、彼女はそう思うかな」

鋭く閃く眼光に、鳳昇は笑みを収めた。

「……どういうことです？」

冗談の延長かと軽い気持ちで訊ねる。小さな主は、彼の心の内な

ど見通したかのような、謎めいた微笑を浮かべた。

「さて　ただ、きつと今頃、我々を追ってきているだろうな、と思っただけだ」

「そんな……まさか」

ありえない、と続けようとした彼の言葉は途中で止まる。風鳴の表情が、あまりに確信的だったからだ。

「風鳴様　何か、彼女に？」

鳳昇とは正反対に、明るい瞳で風鳴は頭上の月を見上げる。

「別に大したことはしてないぞ？　ただ、お前が後生大事に胸元に収めていたあれを、ちよつと拝借したまでだ」

平然と言われて鳳昇は顔色を変え、胸元を探った。当然あるはずのものが消えている、そのことにおそらく初めて、彼は主の前で動揺を見せた。よっぽどそれが嬉しかったのか、満足げに風鳴は声を上げて笑った。

「さあ、どうする。かりにも亡国の王女が、お前を追ってくるかもしれないのだ。放っておくことはできないな？」

さも可笑しそうに問われて、鳳昇は思わず背後を見やった。まだ見えもしない面影が、そこにあるような気がして　。

「　彼女、泣いていたぞ？」

怪訝な目で瞬いた鳳昇に、風鳴は相変わらず感情を読ませないような瞳で微笑んだ。

「あの切ない涙には私まで心が動きそうだったな。あんなにすがりつかれてまで無下に扱ってはあんまりというものではないか。意志を貫くのも結構だが、いい男というのは女を泣かせないものだ」

ようやくその意図を飲み込んだ鳳昇が、顔を赤くする。

「ご覧に、なっぺいらっしやっただのですか　」

ちつとも悪びれずに風鳴は平然と頷いた。

「私は彼女付きの女官だったんだぞ？　それだけではなく、彼女の動向を見守り、万が一の危機に備えるのが私の役目だったのだから、当然だろう。言っておくが、彼女が自由に宮を行き来できたのは双

剣が泳がせていた為だけだと思っただか？ 私の働きによるところも多いのだぞ。感謝されこそすれ、非難される覚えはないがな」

あつさりと笑われて、鳳昇は複雑な顔で瞳を逸らした。

「全く悪趣味でいらっしやる そのようなところはお父上にそっくりですよ」

精一杯の皮肉を返した鳳昇にさえ、風鳴はひらひらと片手を振った。

「いや、母ゆずりだぞ、これは。人生万事楽しむべき、というのが森の民の考え方だからな」

あくまで食えない主に、降参したかのように鳳昇は黙った。

「さてと、私は先に発たせてもらうぞ。いくら末の放蕩息子で許されてはいても、少々遊びが過ぎた。父上の大目玉を食らう前に、帰還といかなくてはな。それに何より 急がなくては祭りに間に合わん。最上の黒馬乳酒が飲める、年に一度の機会をみすみす逃すわけにはいかんのだ」

言って、馬上の荷物を整え始める風鳴に、鳳昇は思わず歩み寄る。

「風鳴様」

責めるように呼んだ声に秘められたのは、戸惑い。それすらもわかつているかのように、風鳴は朗らかに片手を上げた。

「お前には休暇を取らせる。今回の功労者への褒美だ。そのまま帰ってくるなり、旅にでも出るなり、好きにするといい」

あつさりと背を向けた主の後姿を、鳳昇は一瞬啞然として見送る。すぐさま深く頭を下げた彼の顔には、既に穏やかな笑みが宿っていた。

「ありがとうございます 風鳴様」

呟いた彼の前から、素早く馬に跨った風鳴の姿が遠ざかっていく。振り向かず、風鳴は笑った。

「目的の一致、だけのつもりが……僕も結構お人好しだったってことかな」

年相応な彼の笑顔を、見る者はもういない。

草原を静かに照らす月に寄り添うように、一つの星が輝いていた。

\*\*\*

天高く昇った大きな月。

満天の星空と、優しい月光に導かれるように、麗凜は馬を駆った。教わった通りに、ひたすら東へと進む。

邪魔になる王女の衣装は脱ぎ捨てた。

代わりに身につけたのは、残っていた風彩の兵に借りた、簡単な旅装。

長い黒髪だけが風にたなびき、唯一麗凜の生きてきた過去を思い出させるものだった。

どれほど先へ行ってしまったのかもわからない。

それでもなぜか 必ず会える、そんな予感が麗凜を導いていた。時を忘れて駆け抜け続けて、ふと見えてきた草原で、何かにいざなわれるように馬の手綱を引いた。

頭上に見えた、星のせいだったのかもしれない。

「あれは……」

静かな静かな草原に、麗凜の咳きが滑り行く。

黄色い月に寄り添うように並んで浮かぶのは、薄桃色の星だったのだ。

そして視線を向けた先で、麗凜は瞳を止めた。

一人静かに佇む人影 ここからでは顔も見えないけれど……。草を食む馬の背を撫でるその人物に、麗凜はゆっくりと近づいて

いった。

真正面に立つた麗凜を見ても、その人は動揺も見せずに、まるでわかっていたかのような瞳を向けた。

「やはり 追いつかれませんでしたね」

何かを観念したかのような鳳昇の顔に、麗凜は黙って頷いた。こうして向かい合ってみると、あの頃より視線が近く感じる。

ああ、そうだ 自分の背が、少し伸びたのだ。

昔、いくら願っても届かないようだった彼に、それでもわずかに近づいたように思えた。

十七年が離れた少女など、子供としてしか見られていないと思っていた。

それでもいいから側にいたかった。

でも、今は。

決意を込めたような麗凜の瞳を、鳳昇は静かに受け止めていた。

「あなた やっぱり周李なのね」

問いかけではなく、確信に満ちた麗凜の言葉。

鳳昇は、ゆっくりと微笑を浮かべた。

「またそのようなことを……私は鳳昇だと、何度も申し上げたはずだ」

そう言っつて、麗凜から距離を取るように、彼は歩みを進める。

その背中が少し遠くなるのを待って、麗凜は駆け寄ろうとした。

そして近づきかけたその時、草に足をとられたように、麗凜は小さく声を上げてその場にうずくまったのだ。

「足が」

痛そうに顔をしかめてそう呟いた麗凜に、あわてたように鳳昇が駆け寄る。

「痛むのですか？ そのように走ったりされるから」  
「言っつて、心配そうに彼が触れたのは、麗凜の左足。」

それを確かめてから、麗凜は鋭い瞳で鳳昇を見上げた。

「左足が痛むなんて、言っつてないけれど」

麗凜の言葉に、鳳昇はすぐに手を引いた。ほんのわずかな彼の狼狽で、麗凜は確信を込めて笑ったのだ。

「やっぱり……昔、落馬しかけた私をかばってくれたのは、あなただったものね、周李」

例によつて周李の止めるのも聞かずに、無理な走り方をした自分を体ごとかばったのは周李で、その時、左足をひねってから、時々彼の注目を引くために痛むふりをしたものだった。

もちろん周李は本気で心配してくれていたけれど……。確かに二人しか知りえない記憶だ。

食い入るように見つめた麗凜に、動揺をすぐに隠して鳳昇は瞳をそらす。

「そんなことは、ただの偶然ですよ」

まだ頑なに否定する鳳昇に、麗凜は唇を噛んで立ち上がった。

「どうして……どうして、そんなにまで否定するの？ もう私にはわかってる！ あなたが周李であるのは、隠しようがない事実だわ！ それなのに、一体どうして……！」

半ば睨むように見上げた麗凜は、衣装の胸元から取り出したものを、彼に見せ付けるように掲げた。

古い皮袋　手のひらに収まるほどの大きさのそれを、目の前で開いてみせる。中から出てきたものは、黒く長い頭髪の一束。突きつけた麗凜に、鳳昇は凍ったような、それでいて穏やかな微笑を返した。長い間見つめあっていた視線を先に逸らしたのは、鳳昇だった。

「これは、あなたのものでしょう？」

苛立ったように問いかけた麗凜の声にも、彼は瞳を上げずらなかつた。

「だったら……どうだと言つんです？」

低く、ただそれだけを返されて、麗凜はついに堪えきれずに頬を真っ赤にした。

「それでも　まだ違つと言つるの？　じゃあ、これは一体何なの！

この髪を束ねている飾り紐　この黄色は……峰陽では王族にしか許されない色、そして風麗花の刺繍は、私の大好きだった模様だわ！　あの時、血に汚れた……千切れた私の飾り紐よ！　あなたが、周李でないのなら……どうしてこれを持つてるといふの！」

麗凜にとつて、決定的な証拠であるその飾り紐を見せられてもなお、鳳昇は言葉を発さなかった。ただ苦しげに、両目を固く閉じて、彼女から顔を逸らしたのだ。

「周李　！」

長く、美しかった彼の髪　もはやその持ち主が、目の前の鳳昇であるのは間違いないというのに　。唯一彼の過去を示す髪のを、麗凜は震える手で握りしめる。

なぜだか悔しくて悲しくて、どうしようもない気持ちを、ついに麗凜はあふれる涙と共に鳳昇にぶつけた。全身で彼にぶつかって、衣服の胸元を掴む。両のこぶしで何度も、何度も鳳昇の胸を打った。

「あの時……守るって言うてくれたじゃない！　あの言葉は嘘だったとしても言うの？　恋待星と一緒に見た　あの夜を本当に知らないと言うつもり？　それなら、今ここでそうだと言いなさい！　恋待星の下で……私の瞳から逃げないで、はつきりとそう言うてごらんなさいよ！　周李。周李ったら　！」

涙で濡れた頬もそのままに、必死で見つめた麗凜。心の底からの彼女の叫びに、鳳昇はついに耐えられないように顔を背け　そして、深い息を吐いた。

「守ると……そう言ったからですよ」

苦しそうに発されたその呟きに、麗凜は顔を上げる。

彼女の瞳をようやく見つめて、切なげな表情を返した鳳昇は、夜空に浮かんでいる薄桃色の星を見やった。

「あなたを守ると　そう言うておきながら、できもしなかった。無様に倒れ、あなたの命を危険にさらした。誰よりも大切に……守るべき人を敵の手に渡してしまった。あなたを失ったと思った時、自分を殺したいほど憎みました。すぐにでもお救いしたかった……」

それでも矢傷から体も動かせず、自分の力だけでは何もできなかったのです。全ては、風鳴様がおられたからこそできたことだ。そんな情けない自分が、今更どんな顔であなたの前に立つことができると言うのです！」

叫んだ鳳昇は、今まで秘めていた心の苦しみを、堪えきれずに吐き出したように見えた。

別人として自分の前に立っていた時には見せなかった、彼の本当の心が伝わってくる。

「この髪は……私の捨てた想いと、誓いの証です。もう二度と同じ過ちは繰り返さないために、持ち歩いていたまで。あなたを救い出す、という目的は果たした。もう意味のない物に過ぎません」

悲壮なまでに、きっぱりと言いつ切った彼は、麗凜の手にした髪の毛から決別するように背を向ける。

「周……李」

何とも言えない気持ちでその名を呼んだ麗凜に、鳳昇は力なく首を振った。

「それはもう捨てた名です。今の私には過去も何も無い、風彩国の鳳昇だ。そうやって生きていくと、心に決めたのです。あの草原で、風鳴様に拾われたあの夜から」

「それでも助けに来てくれたわ！ 私のために 危険をおかして双龍国まで……そうでしょう？」

彼が黙って消えた時に確信したのだ。自分を助けるために、何も言わずに、何も教えずに、全てをやったのけた。自分の正体さえ明かさずに。

そんなことをするのは、周李でしかあり得ない。不器用で、控えめで、自分のことはいつも後回しにしてきた周李。どんな時でも麗凜のためだけを考えてくれていた、そんな彼でしか。

揺れる瞳で見上げる麗凜に、鳳昇は苦しげな表情を濃くした。

「あなたには もっと他に、ふさわしい男性がきつといるはずです。私などよりずっと素晴らしい……」

彼の言葉は、最後まで続かなかった。静かな草原に響き渡ったのは、麗凜が彼の頬を平手で打った音だった。

「麗、凜様」

驚いたようにそう呟いた彼に、麗凜は泣き笑いのような表情を浮かべる。

「やっと……そう呼んでくれたわね。馬鹿な周李　いつも私の幸せを最優先にして……そんなに想ってくれるなら、どうして気づかないの？　私がずっと待っていたのは、ただ一人。他のどんな男性ひとでもない。周李、あなただけだった……！」

言った瞬間飛び込んだ麗凜を、鳳昇はためらいながらも受け止めた。彼の腕の中に、すがりつくように麗凜は身を寄せる。

「あなたが過去を捨てると言うのなら、私だって同じだわ。今の私  
はもう王女でも何でもない。峰陽にも双龍にも縛られない、ただの麗凜よ。こんな私には、もうあの夜の言葉は……聞かせてはもらえないの？」

涙に濡れた麗凜の瞳を、鳳昇は信じられないような目で見つめ返す。

「私は　もう小さな子供じゃない。あなたを想う気持ちなら誰にも負けない。だめだって言ったって、絶対に離さないんだから。今度は私が、どこまでだってあなたを追いかけてみせる　！」

いたずらっぽく笑って、しっかりと彼の腕を掴んだ麗凜　その強い瞳に、ついに鳳昇は表情を緩めて、深く、深く息を吐いた。星空を見上げて、彼は呟く。

「私の……負けですね。いいえ、もうずっと、負けていたのかも知れない。初めて出逢ったあの日から、あなたはいつでもそうやって私を魅了してきたのだから。……十も離れた少女だからと何度想いを打ち消そうとしても、そんなものも身分すらも簡単に乗り越えて、あなたは私の心を掴んで離さなかった。もはや全てのしがらみをなくした今　どうやってあなたに勝てるというのでしょうか」

ただ静かに、独り言のように言った鳳昇は、観念したかのように

そつと瞳を閉じる。

黙って、彼の言葉待つ麗凜の前で、ゆっくりと　彼は微笑んだのだ。昔のままの、優しい瞳で。

「ご苦労を、おかけすることになりますよ？」

そつと問われて、麗凜は首を振る。

「構わないわ」

鳳昇は、それでもためらったかのように続けた。

「王女であった頃のような生活は、できなくなるのですよ？」

見つめ返す麗凜の瞳には、一片の戸惑いすらない。

「そんなもの、もともと好きでなかったわ」

はつきりと言い切った彼女に、鳳昇は最後の抵抗のように訊ねる。

「本当に　後悔なさらないのですね？」

その言葉に、麗凜は強い瞳で頷いた。

「あなたを失うこと以外には、恐れることなど何もないわ……！」

しつかりとした返答に、鳳昇は深い思いを整理するかのよう瞳を閉じ、そつと開いた優しい瞳で彼女を見つめる。大切そうに、白く滑らかな頬を片手で包んだ。

「ずつと……お慕いしておりました　麗凜様。私と……共に来てくださいますか？」

耳にした言葉に、麗凜は花が咲いたような笑みを浮かべる。悲しすぎたあの夜の告白が、もう一度生まれ変わったように色を変えて、麗凜の心を打つ。染み渡っていくそれは、まぎれもなく、ずつと、ずつと待ち続けていた、愛しい人からの最高の言葉だった。

「ええ　周李。いいえ、鳳昇……あなたとなら、世界の果てまで　でも　！」

煌いた彼女の涙は水晶のように美しく、幸福な笑顔を彩る。麗凜を強く、強く腕におさめた　鳳昇は、風に揺れる彼女の長い黒髪を、万感の想いを込めたように、愛しげに撫でた。

\*

天高く、恋待星の昇る頃、静かな静かな草原に、二頭の馬が並んで駆ける。

寄り添う影は、長く伸びて 恋人たちの行方は、星たちだけが知っている。

## 終章

暖かな風が草原を舞い踊る。

草と土の匂いを吸い込んで、笑顔の子供たちが駆けていく。

満開の風麗花が、優しく揺れている。

小高い丘になった斜面に、こんもりと丸く土がもられている。

火葬は二度死ぬといって嫌うこの国の民が古くから行ってきた土

葬 山と大地を愛する彼らが、静かに眠る方法だ。月日が流れ、それ自体が一つの山であるかのように、緑に覆われていた。茂る草で半分ほどは隠れてしまった石碑を指差して、一人の子供が振り返る。

「ねえねえ、これって大昔の王様のお墓なんだって。知ってた？」  
「うん、母ちゃんが言ってたよ。なんとかっていう、偉い王様だっ

て。ほらこれ、紫のおつきな石が埋め込まれてるだろ？　これが王様の証らしいよ」

「ふうん」

さして興味がなさそうに頷いた後、興味をなくしたように子供たちはまたはしゃぎ始めた。

「この鳳陽国ほうやうこくを作った、えらい王様なんだってばあ！」

まだ墓を見つめていた一人が名残惜しげに叫んでも、戻ってくる子供はいなかった。

戦乱を乗り越えて、この国を作り上げた初代の王　誰もが耳にはしていても、既に平和な世しか知らない子供たちには遠い過去の話だった。

風彩国と鳳陽国　強い同盟で結ばれた二つの国は、大陸の風彩半島の鳳陽とうたわれる大国である。その歴史で並び称された二人の若き王は、自らが築いた幸福なこの国を鳥になって見つめているという伝説のみが語り継がれている。

華美な墓を作ることを拒否し、民と同じように静かに眠ることを選んだという王の話は、村の年寄りたちなら誰もが知っていた。彼のおかげで半島は統一され、平和な時代が来たのだと聞かされても子供たちにはぴんと来ない話だった。

草の上で転げまわり、笑い合う子供たちがふと思いついたように空を見上げる。

「そつえば、恋待星のお話知ってる？」

女の子たちは示し合わせたように頷いた。歴史上の王様なんかよりも、興味がある話なのだ。

「知ってる、知ってる！　昔、生き別れた恋人たちが空に願って、再び巡り逢えたっていうお話でしょう？　恋待星が現れた時に空に願ったら、その恋は叶うって聞いたよ」

「好きな人と一緒に見たら、二人は永遠に離れなくていいんだって。本当かな？」

「恋待星の女神様が、絶対叶えてくれるんだよ！」

「じゃあ、麗花、お願いしてみたら？」

「恥ずかしいよ、朱麗ったら」

つつきあう女の子たちを遠まきに眺める男の子たち。この国の少女には、とかく『麗』の字を使った名前が多い。幸せになれる、と  
いう言い伝えからだった。

幼い恋が育まれるのを、風麗花たちが見守っている。

紫水晶が光る石碑のそばには、実は丸く盛られた二つの墓がある  
ことを、誰も知らない。

草原の春は、静かに過ぎ行く。

(後書き)

長い物語を読んでいただき、ありがとうございます。

この作品は第三回小学館ルルル文庫新人賞に応募したものです。残念ながら結果は一次にも通らず。

ということですが、どんなところが良くないのか、など何でもいのでご指摘ください。

厳しくても結構です。よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5960f/>

---

馬駆ける草原に、恋待星は昇りて。（改稿版）

2011年2月9日23時12分発行